
バカと天才の交響曲

KAKEDA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと天才の交響曲

【Nコード】

N7778K

【作者名】

KAKEDA

【あらすじ】

文系科目がAクラスレベルの長尾 颯介はくだらない理由でFクラスとなってしまう。馬鹿の集まりのFクラスに不安を抱きながらも打倒Aクラスを決心する。友情・恋愛などなど。（原作キャラとのカップリング有り、苦手な方はすぐにお戻りください）更新速度は作者の気分次第となります。

プロフィール

名前 長尾 颯介
(ながお そうすけ)

性別 男

誕生日 11月9日

身長 168センチ

容姿 髪、眼は両方とも茶色ぽいっ黒。髪型はショートカット。
体格は細いがそこそこ力がある。

性格 基本的温厚

学力 文系科目がAクラスレベル。他の教科は大体160点くらい。

召喚獣 自分にそっくりで黒のローブを羽織っている。武器は死神みたいな鎌

腕輪能力 『ワープ』 点数を20%削り、目に見える範囲に空間移動できる。ちなみにこの能力を使用した後の一撃目は攻撃を食らった召喚者に痛みがフィードバックされる。

第一問 【試験召喚戦争】その1（前書き）

問 以下の問いに答えなさい。

『調理の為に火をかける鍋を制作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を1つ挙げなさい』

姫路瑞希の答え

『問題点……マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為危険であるという点。合金の例……ジュラルミン』

教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』では駄目という引っ掛け問題なのですが、姫路さんは引っかかりませんでしたね。

土屋 康太の答え

『問題点……ガス代を払っていなかったこと』

教師のコメント

そこは問題じゃありません。

吉井 明久の答え

『合金の例……未来合金（↑すごく強い）』

教師のコメント

すごく強いと言われても。

長尾 颯介の答え

『合金の例……ガンダニウム合金』

教師のコメント

今の世代でファーストを知っているとは話が合いそうです。

第一問 【試験召喚戦争】その1

「大丈夫そうか？」

「……うん、もう血、止まった」

『おいしい 翔子』

「君の連れが来たみたいだね。 それじゃあな」

「……でも、あなたのハンカチ」

「いいよ、貰っちゃって」

少年は颯爽と走り去っていった。

「翔子、さっきのは誰だ？」

「……ん、助けてくれた。 雄二、彼にまた会えるかな？」

「ん？ この町にいるなら、多分、また会えるんじゃないか？」

「……そう」

文月学園で二度目の1年が今日から始まる。俺は桜並木を眺めなが

ら、ゆったりと歩いている。

何気なく、校舎の方を見てみたら、我が親友、明久が鉄人と話を終え、校舎に入っていたところだ。

明久とは家が隣同士なので、家族同士での交流があった。今、俺の親は海外出張のため1人で住んでいる。

明久も同じ理由で1人なので、たまに飯を作り、いっしょに食うほどの親友だ。

絶対に明久はFクラスだろうな。アイツは本物の馬鹿だしね。

……と、なんやかんや考えているうちに、玄関前で我らの敵である、浅黒い肌をした短髪の男の前だ。

「長尾、また遅刻か」

「おはようございます。鉄村先生」

軽く頭を下げ挨拶する。一応先生であるため敬語を使用する。

「西村だ。渾名と名字を混ぜるんじゃない」「そうでした。間違えました。」 間

彼の名は生活指導の鬼、西村教諭だ。彼の趣味はトライアスロンのため、生徒間で『鉄人』と呼ばれている。1年中、半袖でいることも理由の1つになっている。

「それと、普通に『おはようございます』じゃないだろうが」

「あ、そうか。 今日も肌が黒光りしてますね。 後、遅刻してすいません。睡眠不足なもので」

「……俺の肌は余計だ。 まったく、お前は罰を与えても改善せんし、罰を罰と思ってないから吉井達より厄介だよ」

深い溜め息と共に先生がつぶやく。吉井達とは明久と雄二の問題児のことだ。俺は雄二と共に問題を起こすが、勉強ができるため先生達は俺を強く注意することが出来ない。

例外は鉄人のみで、彼の罰を受けて、反省しないのは学園の中で俺1人だけのため学園内で英雄視されている。

明久の場合は罰を受けて、反省するけれど、馬鹿なので反省心を忘れて、また問題を起こす。

「先生。 俺は青春を普通に謳歌しているだけですよ」

「そうだとしても限度というものがあるだろうが。ほら、受け取れ」

先生は箱から封筒を取り出し、差し出してくる。封筒には『長尾颯介』と、大きく俺の名前が書いてある。

「見なくても結果は分かっているんだけどね……」

そう言いながら、封筒を受け取る。

「試験を受けていたなら、お前はAクラスに行けたのだから。残念だ」

文月学園はクラスがAからFまであり、二年生以上はAから順に振り分け試験で成績でクラスが決まる。

この学力審査によって分けることは差別的な感じがするが、中々、理にかなっていると思う。

何故なら、学力の理解度が同じ者同士ならば、授業の進みも円滑になる。

また、差別化にすることで学力の競争心が出て、学力が向上しやすくなる。何年か前のゆとり教育よりもはるかにいいと俺は思う。

「試験当日にぶっ倒れて休んだんですから、しょうがないですよ。」

ちなみに倒れた理由はゲームを試験の前日からぶっ通しで朝までやっていたからだ。

それが原因で学園に行こうかと思った時に倒れてしまった。さすがにヤバイと思ったので医者に行くため学園を休んだ。テストは無得点となった。

中々、開かないなこの封筒。面倒だから破いて開けるか。

ビリビリッと封筒の真ん中が縦に破かれる。中には二枚に破かれた白い紙が現れた。

「そういう開け方をするんじゃない」

「すみません」

破かれた紙を繋ぎ合わせ、クラスを確認する。

『長尾 颯介……Fクラス』

「まあ、1年間辛抱してくれ」

予想通り、最底辺のFクラスとなった。

Fクラスは新校舎を渡り、旧校舎にあるため、結構遠い。

今年から試験召喚戦争ができるはずだから、Aクラスに戦争を仕掛けてみるか……？ でもなあ、Fクラスだからなあ……勝てるかな

「と、Aクラスか……見てみるか」

Aクラスの設備はどんなもんかと覗いてみる。

覗いてみて後悔した……。設備はノートパソコン、個人エアコン、冷蔵庫、リクライニングシート、etc……。俺の家よりも遥かに豪華だ。

もし、タイムマシンというのがあるならば、俺は過去の自分の代わりに試験を受けに行っているだろう。
恨めしそうに見ていると教室から誰かの視線を感じたため誰なのか探してみた。

視線の主は肩まで伸びた黒髪の少女だ。大和撫子という言葉が合いそうな子だ。後、巫女服とか。

何故だが知らんがびっくりしたような顔をしている。そんなに俺の顔がおかしいのか？

「えっと、長尾君？」

後ろから誰かに呼ばれたので振り向く。そこには背中まで届く柔らかそうな髪に白い肌、そして、なかなかの大きさの胸を持つ姫路がいた。

学園内では彼女にしたいランキングの1位を争うほどだと聞いている。誰と争っているかは聞き逃したが……。

「姫路かAクラスはもう始まってるみたいだぞ」

「あ、いえ私はFクラスなんです」

姫路の言葉に不意を突かれた。恐らく、今の俺はかつて無いほどのまぬけ面をしているだろう。

「へ？ 冗談だろ？」

「えっと……試験中に風邪でともに受けられなくて、途中退席してしまったので無得点扱いなんです。 長尾君はAクラスなんですよね……」

姫路は気まずそうに答える。なんて運がいいのだろうか。 姫路がFクラスに入るとなれば、少しは試召戦争での勝率が上がる。

「試験の日、俺はいなかったよ」

「え？　どういことですか？」

姫路は目をキョトンさせる。　ヤバイ、可愛い。　だが落ち着け、俺。

「試験の朝ね、倒れて、学校行く代わりに医者に行ってたからね。無得点でFクラスなんだよね」

「えっ、そうなんですか？」

姫路は目を白黒させていた。――ッ！　何か、猛烈に寒気がする。Aクラス内の先ほどの少女からだ。

さっさとFクラスに行ったほうがよさそうだ。　触らぬ神に祟りなしって言うからな。

「姫路、とりあえずFクラスへ行こうぜ」

「あっ、そうですね」

俺と姫路は話しながらFクラスへと向かうことにした。

第二問 【試験召喚戦争】その2（前書き）

問 以下の文章の（ ）に正しい言葉を入れなさい。

『1592年に（ ）による朝鮮出兵が始まる』

姫路瑞希と長尾颯介の答え

『豊臣秀吉』

教師のコメント

そのとおりです。戦国時代の有名な人なので簡単すぎたでしょうか？

12

土屋康太と吉井明久の答え

『木下秀吉』

教師のコメント

木下君が頭に浮かんだのでしょうか？ 一応間違えでは無いですがそれは旧姓なので不正解とします。

第二問 【試験召喚戦争】 その2

「……ここか」

Fクラス前に到着したのはいいのだが、外見からしてボロッて感じの擬音が出そうな程のボロさだ。

「長尾君、入りましょうか？」

たどたどしく姫路が聞いてきた。あまり気乗りしないが、覚悟を決め入ろうかとドアに手をかけた時だった。

『ダアアーリーーン!!』

教室内から鳥肌が立つ程の野太い声の合唱が聞こえた。俺と姫路の間で不安が流れた。

「な、長尾君……」

「だ、大丈夫だ。皆、良い奴らだよ。うん……」

二度目の覚悟を決め、教室に入った。

「すみません、遅刻しました」

「遅れて、すいま、せん」

黒板の前に立っている先生？らしき人に謝罪を述べる。この人な

んか、ワンカップ持たせると無職のオジサンに見えるな。

教室内は驚いたように騒がしくなる。

「ちょうどよかったです。今自己紹介しているところなので二人もお願いします。」

無職の、じゃなかった。先生は覇気の無い声で騒がしいクラスを静かにさせた。

「わかりました。 長尾 颯介だ。 1年間、よろしく」

クラス内を見渡し、軽く手を振る。 うん、Fの設備、酷いね。

綿が入ってなさそうな座布団に机の代わりにちゃぶ台、壁や窓の状態も最悪だ。

「えっと、姫路 瑞希といいます。 よろしくお願いします。」

続いて姫路は身体を縮ませるようにして自己紹介をした。

教室内はしーんとしている。そんな空気を破るかのように1人の男子生徒が声を挙げた。

「はいっ！ 二人に質問です」

「なんだ？」

「なんでここにいますか？」

おそらく、このクラスの1年時、俺らと同じクラスでないものは疑問に思っていることであろう。

姫路は可憐な容姿に加え、成績は上位一桁だ。俺は自分で言うものなんだが容姿は悪い方ではない。

成績はと言うと姫路と同じく、上位一桁台で一度だけ1位になったことがある。そんな二人はAクラスだろうと思っていただろうな。

「俺は試験の日具合が悪すぎて休んでいた」

「わ、私は試験の最中、高熱を出してしましまして……」

試験日に休むことと試験途中での退席は0点扱いになると皆思い出し、納得したようだ。その後、クラスの中から馬鹿の言い訳が挙がったがまあ、割愛しよう。

俺らは紹介を終え、空いている席へと着く。

「よっ、雄二」

「ああ、今年も頼むぞ、颯介」

軽く、悪友と挨拶し、ちゃぶ台に突っ伏す。

ん？ 俺のちゃぶ台がカレー臭いっ！ 最悪だ…… そうだ明久のと交換しよう。

雄二と明久が姫路との話に夢中になっているようなのでこっそりと交換した。

「颯介、明久に興味を持っている奴を知っているよな？」

交換し終わった後に雄二から話しかけられた。

「ああ、知ってるぞ」

「誰なんですかつ！？」

姫路がずいっと近寄り、追求して来た。明久好きは健在のようだ。

「久保利光だったな。色々明久について教えてくれて聞いてきたな」

「……………」

余程、ショックだったのか声を殺して泣き出した。

「まあ、気にするな。半分冗談だ。安心しろ」

雄二がそう声をかけた。雄二……半分どころかアイツ、本気なんだよね……

「え？ 残り半分は？」

「ところで姫路。体は大丈夫なのか？」

見事なまでのスルーだ。

「あ、はい。もうすっかり平気です」

「ねえ雄二！ 残り半分は！？」

明久はもう一度聞くが相変わらず雄二はスルーだ。

「颯介！ 残り半分って何なのさ！？」

どうしても気になるのか、俺に聞いてきた。口にしたら可哀想なので無言で胸の上で十字を切った。せめて安らかにな……

「ねえ！ 何か言ってよ！ 気になるじゃないか！？」

明久の声が教室に響く程大きくなる。

「はいはい。そこの人達、静かににしてくださいね。」

パンパン、と教卓を叩いて先生が警告を発してきた。

「あ、すいませー」

そう明久が言いかけたところで突如、教卓が音を立てながら崩れ去った。……最悪だ。そこまで最低なのか。

「え……替えを用意してきます。少し待っていてください」

先生は気まずいそうに告げると、逃げるように教室から出ていった。

「「あ、あはは……」」

偶然にも姫路と声が重なる。もうここまできると、無理にでも笑うしかない。なんてしていると明久と雄二が教室を出ていった。

まあ、ほっというておこう。とりあえず、仲の友人と話でもするか。

「よっ、康太。また1年頼む」

「……こちらこそ」

口数が圧倒的に少ない奴だが、話が割と合うのだ。趣味とかの方で……

「そうそう新しいの出たから渡しておくよ」

バックから中身が見えないように包まれたディスクを手渡す。

「……感謝する」

「何、お互いさまだろ」

ディスクの中身はというと未成年お断りの内容だ。

「ん？ 何を渡したんじゃ？」

その様子を見ていた。女の子にしか見えない秀吉が話しかけてきた。一応、本人は男と言っているがどうみても、女の子にしか見えない。

「女子には教えられない」

「だから、ワシは男じゃ！」

ははは、そう否定するところも可愛いなあ。

「分かってるよ。秀吉は秀吉だよ」

「……（コクコク）」

「それはおかしくないかのう……」

「気にしたら負けだ。」

「長尾。 また、同じクラスね」

また新たに声をかけてきたのは胸以外のプロモーションバッチリの島田だ。

「今、とても不愉快なこと思わなかった？」

「滅相もございません」

なんというエスパーだ！？怒らすと酷い目に合うのは明久で学習済みなので、下手にでる。

「あ、ほら先生が戻って来たぞ」

「そうみたいね」

教室に戻って来た、雄二と明久に続いて先生が入って来る。新たな教卓に取り替えて、HRが再開される。

「なあなあ、雄二」

「なんだ？ 颯介」

先生に聞こえない程度に雄二に話しかける。

「Aクラスを相手に試召戦争を仕掛けないか？」

「ああそれなら、明久とさっき話してた。 Aクラスに仕掛けるさ」

へえ、アイツがね……珍しいな。

「坂本君、キミが自己紹介最後の1人ですよ」

「了解。」

先生に呼ばれて雄二が席を立つ。ゆっくりと教壇に歩み寄る。何か演説でもやるのかな？

「坂本君はFクラスのクラス代表でしたよね？」

先生に問われ、うなづく雄二。そして自信に満ちた表情で教壇に上がり、俺らに向き直る。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも、好きなように呼んでくれ」

クラスメイトはどうでもいいのか、雄二を見ていない。

「さて、皆に1つ聞きたい」

雄二はゆつくりと、全員の目を見るように告げる。間の取り方がかなり上手い。この時点で皆、雄二に釘付けた。

大衆をまとめる方法は色々ある。力でまとめることが一般的だが、このクラスは不満をまとめるというやり方が一番だろう。

雄二の視線は教室内の各所に移りだす。クラスメイトもつられて備品を順番に眺めていく。

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが――」

一呼吸おいて、静かに告げる。

「――不満はないか？」

『大ありじゃあっ!!』

二年F組生徒の魂の叫び。

「だろう？俺だってこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている」

それに続いて、不満の声が次々とあがる。

「みんなの意見はもつともだ。そこで」

雄二は不適な笑みを浮かべ、

「これは代表としての提案だが――」

これから戦友になる仲間たちに野生味のある八重歯を見せ、

「――Fクラス代表はAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」

Fクラス代表、坂本雄二は戦争のトリガーを引いた。

第三問 【試験召喚戦争】その3（前書き）

問 次の問に答えなさい。

柔道で技をかけられた時にとる行動を何と言うか。

姫路瑞希の答え

『受け身』

教師のコメント

そのとおりです。簡単ですね。

長尾颯介の答え

『たたみパン』

吉井明久の答え

『たたみバーン』

教師のコメント

二人とも職員室に来なさい

第三問 【試験召喚戦争】 その3

Aクラスへの宣戦布告。Fクラスにとっては無理ゲーに相当するだろう。

『勝てるわけがない』

『これ以上設備を落とされるなんて嫌だ』

『姫路さんがいたら何もいらない』

そんな悲鳴が上がる。試験戦争で重要なのは点数だ。Aクラス1人相手にFクラスが5人で掛かって、やっと勝てるといった程の戦力差だ。

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる」

戦力差があると知っていながら、雄二はそう宣言する。

『何を馬鹿なことを』

『できるわけないだろう』

『何の根拠があってそんなことを』

否定的な意見が出てくるのは目に見えていた。確かにそれは分かるが、やってみなきゃ分からないだろうといってやりたいが雄二に任せよう。

「根拠ならあるさ。このクラスには試験召喚戦争で勝つことのできる要素が揃っている。それを今から説明してやる」

不敵に笑い、壇上から皆を見下ろす悪友。

「おい、康太。畳に顔をつけて姫路のスカートを覗いてないで前に来い」

「……………!! (ブンブン)」

「は、はわっ」

必死な顔と手を左右に振り否定のポーズを取る康太。姫路がスカートの裾を押さえて遠ざかると、康太は顔をさすりながら壇上へと歩き出す。

「土屋康太。こいつがあのあるな、ムツツリーニだ」

「…………… (ブンブン!!)」

康太の名前は有名じゃないがムツツリーニという名前が校内で知られている。その名は男子には畏怖と畏敬を、女子には軽蔑を以て挙げられる。

『ムツツリーニだと……………?』

『馬鹿な、ヤツがそうだというのか……………?』

『だが見ろ。あそこまで明らかな覗きの証拠を未だに隠そうとして

いるぞ……』

『ああ。ムッツリの名に恥じない姿だ……』

どんな時でも下心を隠し続ける。それがムッツリーニだ。

「???」

姫路はわからないみたいだ。君は一生わからなくていいと思う。

「姫路のことを説明する必要もないだろう。皆だってその力はよく知っているはずだ」

「えっ？わ、私ですかっ？」

「ああ。ウチの主戦力だ。期待している。」

『そうだ。俺たちには姫路さんがいるんだった』

『彼女ならAクラスにも引けをとらない』

『ああ。彼女さえいれば何もいらないな』

さっきから姫路にラブコール送っているヤツは誰なんだよ……

「木下秀吉だっている」

秀吉は学力では名前を聞かないが、他の事で有名だ。演劇部のホー
プだとか、双子の恐い姉とか。

『おお……!』

『ああ。アイツ確か、木下優子の……』

「さらに、長尾颯介だっているじゃないか」

『鉄人の罰に耐えられる男だ』

『確か、男子の中でトップの学力だったな』

『アイツが木下優子と帰っているのを見たことがあるぞ』

『なんだと!? 異端者じゃないか。今すぐ殺せ!』

『バカ。やめとけ死ぬぞ? それにアイツは永久無罪放免になっている』

『くっ。仕方ない……』

なんだ? クラスから明らかに妬むような視線を感じる?

「当然俺も全力を尽くす」

『確かになんだかやってくれそうな奴だ』

『坂本って、小学生の頃は神童とか呼ばれていなかったか?』

『それじゃあ、振り分け試験の時は姫路さんと長尾と同じく体調不良だったのか』

『実力はAクラスレベルが三人もいるってことだよな!』

いい感じにクラスの士気は確実に上がっていた。

「それに、吉井明久だっている」

……シン――

明久の名前が出た途端一気に下がる。プクック。ホント、おもしろいなあ。

「ちょっと雄二! どうしてそこで僕の名前を呼ぶのさ! 全くそんな必要はないよね!」

『誰だよ、吉井明久って』

『聞いたことないぞ』

よし、俺が言うとしますか。

「知らない人もいるようだし、教えるよ。明久の肩書きは《観察処分者》なんだ」

「なんで言っちゃうのさ! 颯介!」

『……それって、バカの代名詞じゃなかったっけ?』

クラスの誰かがわかりやすい意味を言う。

「ち、違うよっ! ちょっとお茶目な十六歳につけられる愛称で」

「そう。さらにわかりやすく言えば、学校公認のバカだよ」

「肯定するな、バカ颯介！」

《観察処分者》。学校生活を営む上で著しく問題のある生徒に課せられる処分で、去年明久がある事件で《観察処分者》になった。

「あの、それってどういうものなんですか？」

頂点にいた姫路が知らなくて無理もないだろう。実際、俺も聞かされるまで知らなかったしな。

「簡単に言うと教師の雑用だ。主に力仕事などの雑用を、特例として物に触れるようになった試験召喚獣でこなすといった感じだ。でも、召喚獣の痛みと疲れが召喚者に何割かフィードバックされる」

『おいおい。フィードバックされるってことはおいそれと召喚できないということじゃないか』

「まあ、あまり気にしなくていいよ。いてもいなくても何も変わらないから」

「颯介、そこは僕をフォローする台詞を言うべきところだよね？」

「で、雄二、最初にどこを攻めるんだ？」

「こんなに近くにいるのに無視ですか！」

あゝ、無視無視。

「まずはDクラスを征服する。皆、この境遇には大いに不満だろう？」

『当然だ!!』

「ならば全員筆を執れ！ 出陣の準備だ！」

『おおーっ!!』

「俺達に必要なのはちゃぶ台ではない！ Aクラスのシステムデスクだ！」

『うおおーっ!!』

「お、おー……」

クラスの雰囲気は圧され、姫路も小さな拳を作り掲げる。

「明久にはDクラスへの宣戦布告の使者になってもらおう。無事大役を果たせ！」

「……下位勢力の宣戦布告の使者ってたいてい酷い目に逢うよね？」

明久の言う通りだ。噂では去年に下位勢力の使者が登校拒否に陥るほどらしい。どれほどの物なのか明久で試してみよう。

「大丈夫だよ。むしろ、歓迎されるらしい。行ってみたらどうだ？」

「え!?!? それだったら今すぐ行くよ!?!?」

そう言うなり勢いよく教室から出ていった。さてどうなるやら。

「感謝するぞ。颯介」

「や、だって誰かが犠牲にならなきゃいけないだろ？」

「ハハっ。そうだな」

……数分後

「騙されたあっ！」

明久が命からがらのように教室に転がり込んで来た。予想通りに暴行を受けたようだ。その証にところどころにアザがあったり、制服は服として機能しない程に破かれていた。

「やはりそうきたか」

「あっはっはっはっ」

ヤバイ腹痛い程に痛快だ。

「何が歓迎されるだよ！ 暴行だったじゃないか！」

「おもしろいもん見せてくれて、ありがとう」

「あ、どうも——じゃなくて少しは悪びれろよ！」

「吉井君、大丈夫ですか？」

明久の惨状を見るに耐えないのか、姫路が駆け寄った。

「あ、うん。大丈夫。ほとんどかすり傷」

「吉井、本当に大丈夫？」

島田まで駆け寄る。とどめを刺すのかな？

「平気だよ。心配してくれてありがとう」

「そう、良かった……。ウチが殴る余地はまだあるんだ……」

「ああっ！　もうダメ！　死にそう！」

明久は慌てて腕を押さえ転げまわる。さすがは島田だ。俺の期待を裏切らない。

「そんなことはどうでもいい。それより今からミーティングを行うぞ」

他の場所でやるつもりのようで、雄二は扉を開けて外に出て行った。俺もその後を付いて行く。

特に誰とも会話せずに歩いて、階段を昇ろうとしたところで奴が襲来して来た。

「あら、颯介。いいところで出会ったわね」

「げっ！ 木下姉」

階段で出会った奴とは秀吉と似ているが、少し気の強そうな顔つきをしている木下姉だった。俺が苦手とする人の1人である。過去にちょっと一悶着あって、知り合いという関係になっている。

「名前で呼んでって前に言ったよね？」

木下姉——改め、優子にはこやかに微笑むが目だけ笑っていない。

「あ、ああ。そうだった。悪い、優子。そして、さよならだ」

あんまり、話したくないので急いで去るのみ——っ！

「待ちなさいよ。ちょっと話があるのよ。秀吉、コイツ借りるわね」

去ろうとしたところで制服の首のところを引っ張られた。

「り、了解じゃ。颯介、雄二にはワシから言っておこう」

「は？ 待て、秀吉！ おいッ！」

俺の声が聞こえているはずなのだが、秀吉は慌てて去って行く。あの野郎俺を見捨てやがった。

「さあ、話は食堂で聞かせてもらいましょうか。あ、昼食はアンタのおごりね」

「えゝ……」

「今日、お財布を忘れたのよ。お願いね」

「いや、そんなん秀よ——」

「お願いね」

念を押すような声で再度言われる。どうやら拒否権は無いようだ。

「……わかった」

「ふふ、ありがとう」

優子に引きずられつつ、食堂へと入る。俺がおごるという言質をとったせいか表情が少し輝いている。

適当に注文し、空いている席に向かい合って座る。

「で、話ってなんだよ？」

「特に無いわよ。しいて言うなら同じクラスになれなかった埋め合わせかしら」

その言い方だと俺と同じクラスがよかったという事だろうか？

「つまり、すねているわけだな」

「そんなわけないじゃない」

顔を赤くしながら否定された。これはツンデレか！？ いやいや無

い無いコイツに限ってありえない。1年時にそれは証明されている。

「そうですね。本性がヤバイ人にそんなことは無いよね」

「アンタ、修正されたいの？」

静かなる怒りを感じる。

「それは嫌だな」

「だったら言うな」

不機嫌そうに料理を口に運びつつ、答える。

あーあ。今頃、雄二達は何しているやら。そんなこんなで優子の話に付き合い、昼休みが終わっていった。

第四問 【試験召喚戦争】その4（前書き）

問 クラーク博士が残した有名な名言は何か？

姫路瑞希の答え

『少年よ大志を抱け』

教師のコメント

正解です。これはクラーク博士が生徒達に贈った言葉ですね。

長尾颯介の答え

『少年よ大志を抱け』

それは金銭を得ることで自己の利益に対してでもなければ世の中
の人が名声と呼ぶ虚しいものでもない

人間が人間として備えていかなければならない、あらゆることを成
し遂げるために

少年よ大志を抱け』

教師のコメント

全文を訳すとは……。先生は感動しました。

吉井明久の答え

『少年よ大使を抱け』

教師のコメント

漢字が一文字違うだけで大変な事に……

第四問 【試験召喚戦争】 その4

……カリカリ

シャーペンで書く音が二つ教室内で響く。言われずとも分かっていると思うが俺と姫路がテストを受けている。

試召戦争が始まってから、4時間が立っている。その間にFクラスの戦死者が何人も出て、鉄人に連れていかれる悲鳴が次々と聞こえていた。

「二人とも時間です」

「あ、はい」

「ほい」

高橋女史からテスト終了の合図が知らされる。俺と姫路は手元にあるテスト用紙を手渡した。

「次の科目は何にしますか？」

「現代国語でお願いします」

姫路は現国を選んだ。俺は理系科目は午前中にやったので残るは得意な文系科目のみである。

「俺は日本史でお願いしよう」

「わかりました」

高橋女史から裏返されたテスト用紙を手渡される。

「それでは始めてください」

その合図でテスト用紙を表にめくり問題を解き始める。

「先生、次、下さい」

「もうですか？」

「ええ」

「わかりました」

文系科目なら、大体7、8分位で一枚を解くことが出来る。高橋女史から次のテスト用紙を受け取り再び解く。

ピンポンパンポーン《連絡致します》

いきなり校内放送が流れた。この声は確か須川だったな。テストに集中しつつ、放送に耳を傾ける。

《船越先生、船越先生》

船越先生ってあの四十五歳の婚期逃した女史だったな。

《吉井明久君が体育館裏で待っています》

あー、なんとなく読めてきたな。

《生徒と教師の垣根を超えた、男と女の大事な話があるそうです》

明久よ、君のことは忘れないよ。笑いをこらえて、テストを受け続ける。

『須川 ああああああっっ！』

廊下から明久の怒りのこもった絶叫が響き渡った。

「ふふふふ……失礼しました」

高橋女史が微かに笑った。あの冷血な高橋女史がだよ？ いや、あなたも時期に笑えなくなりますよね。あれっ、高橋女史って既婚者だったよな？ おっといかん、いかん。今はテストに集中しないと。

俺達がテストを終えた今現在、DクラスとFクラスは階段付近で乱戦状態だ。遠目で見ると明久がDクラスと対峙している。

「姫路、急ごう」

「は、はいっ！」

姫路に呼びかけ明久のもとへと走る。走っている途中でちらりと姫路の方を見てみる。そこにはゆさゆさと揺れる二つの山が目に入る。いやゝ、ありがたや、ありがたや。心の中で拝み感謝する。

つと、いけない、いけない。もうすでにDクラス代表の平賀の前だ。

「姫路さん達、よろしくね」

「は？」

明久が何を言っているのかわからないといった顔をする平賀。

「ちょっといいかな？」

そんな彼の肩を軽く叩いた。

「え？ あ、長尾と姫路さん。どうしたんだい？ Aクラスはこの廊下は通らなかったと思うけど」

未だに理解出来ていないようだ。ま、俺らがFクラス所属だなんて夢にも思わないだろうし。

「Fクラス所属の長尾颯介だ」

「あ、同じくFクラスの姫路瑞希です。えっと、よろしくお願いします」

俺はハキハキと姫路はもじもじと宣言する。

「あ、こちらこそ」

「Dクラス代表の平賀に古典勝負を申し込む」

「わ、私は玉野さんに古典を申し込みます」

「……はあ。どうも」

「は、はい……」

「サモン」

「サモンです」

各自自分の召喚獣を呼び出し対峙させる。

『Fクラス	姫路瑞希&長尾颯介	V S	Dクラス	玉野美紀
&平賀源二	古典	3 1 2点&6 5 8点	V S	1 1 9点&1 3
2点	』			

「へ？ あ、あれ？」

「う、嘘でしょ？」

姫路の召喚獣は馬鹿でかい剣を持ち、俺の召喚獣は禍々しい程の大鎌を持っている。

「はい。俺の勝ち。『ワープ』」

俺は召喚獣の腕輪能力を使う。召喚獣は平賀の召喚獣の後ろに空間移動し、その首を斬る。姫路も同じタイミングで剣を振り、一撃で

終わらせた。

「いっ、いぎゃああああっ!!」

平賀が首を押さえて転げまわる。腕輪の能力は空間移動なのだが、能力を使った後の一撃目はなぜか痛みがフィードバックされるのだ。

Dクラスとの戦いは平賀の悲痛な叫び声で幕を閉じた。

『平賀が戦死したぞーっ!』

『よっしやーっ!』

この叫び声でDクラス代表が討死したと知れ渡ると、Fクラスの喜びとDクラスの悲鳴が大音響で校舎を駆け巡る。ん？ 何やら雄二と明久が揉めているようだ。

「颯介ー。ペンチ持っているかー?」

ペンチなんか何に使うんだ？ 雄二よ。残念ながらペンチは持っていないので代わりの物を渡しておこう。

「ペンチはじゃないがスタンガンを貸してやる」

「ああ、それでいい」

懐からスタンガンを取り出し、雄二に渡す。

「す、ストップ！ 僕が悪かった！ だからそれをしまうん——ぎ
ああああああっ!!」

明久の懇願も虚しく、スタンガンを押しつけられ使用された。

「よ、吉井君！」

その光景を見て姫路が明久の元へ駆け寄る。まあ、明久が酷い目に合うのはいつものことなので、大して気にしない。

「はあ。僕らの負けだから潔くクラスを明け渡そう。今日はもう遅いから作業は明日でいいかい？」

敗残の将である平賀がそう話す。

「いや、Dクラスを奪う気はないぞ。そうだろ、雄二」

「ああ、俺達の目標はAクラスだ。ただ、Dクラスの設備に手を出さないと約束する代わりにやって欲しいことがある」

「やって欲しいこととは？」

「なに。簡単なことだ。俺が指示を出したら、窓の外にあるアレを動かなくしてもらいたい。それだけだ」

雄二が指したのはDクラス前の外にあるエアコンの室外機だ。確かあの室外機はBクラスのだったな。

「Bクラスの室外機か」

「設備を壊すんだから、当然教師にある程度睨まれる可能性があるが、そう悪い取引じゃないだろう？」

これは破格の条件だ。教師に目をつけられるだけで、教室を奪わないと言っているのだから……。

「それはこちらとしては願ってもない提案だが、なぜそんなことを？」

おそらくだが次はBクラス戦なのだろうな

「次はBクラス戦の作戦に必要なんでな」

「……そうか。ではこちらはありがたくその提案を吞ませて貰おう」

「タイミングについては後日詳しく話す。今日はもう行っていいぞ」

「ああ。ありがとう。お前らがAクラスに勝てるよう願っているよ」

「ははっ。無理するなよ。克てっこないと思っているだろう？」

「それはそうだ。AクラスにFクラスが勝てるわけがない。ま、社交辞令だな」

そんなことを言いながら平賀は去っていった。

「さて、皆！ 今日のご苦労だった！ 明日は消費した点数の補給を行うから、今日のところは帰ってゆっくりと休んでくれ！

解散！」

雄二の号令に応じて、皆がバラバラに解散して行った。俺もさっさと帰ってゲームでもしよう。

「明久。俺は先に帰るからな」

「またゲーム？」

「無論だ。今日中に終わらせたいからな。じゃあな！」

そう言って、教室から鞆を取って、駆け足で帰宅する。

「我が家が見えてきたな」

走って20分程度で自分家が見えて来たところで携帯電話が鳴り出した。相手も確認せずに電話に出る。誰だろうか？

「もしもし？」

『久しぶりの会話ですね。ソウちゃん』

この声はっ——玲さん！？ 相当、面倒な人だ。

「タダイマ電話ニ出ルコトガデキマセン。御用アル方ハ1年後ニ、オ掛け直シ下サイ」

『姉さんはその台詞を何回も聞きました。ですからその手には乗りませんよ』

「……はあ。何か用ですか？」

この人には時報留守は使いすぎたか。電話を切ってもどうせ掛けてくるので渋々聞くことにした。

『素直でよろしいです。用件はですね、アキ君は約束を守っていますか？』

約束ってあれか……。思いつきり破ってるよね。アイツ。仕方ない、助けてやるか……。

「ああ、ちゃんと守ってるよ。他には？」

『そうですか。用件はそれだけです。それではまた……。愛しいソウちゃん』

そう言って電話が切れた。ていうか、このことは俺じゃなくて本人に聞いたほうが良いんじゃないのか？

あの人の溺愛ぶりは昔から知っているが明久は家族だからいいとして、なぜ俺も溺愛されているのか未だに分からない。

ああ、辞めだ、辞め。考えれば考える程意味が分からない。家の中入って早くゲームをやるぞ。その後、ゲームで一日を終えた。

第五問

【試験召喚戦争】その5（前書き）

バカテストを考えるのが中々思いつかないので

バカテストは、たまにやろうかと思っています。

それではどうぞ

第五問 【試験召喚戦争】 その5

Dクラスとの試召戦争の翌日、俺は遅刻確定の時間に学校に登校した。今日は受けていないテストを受けるだけだから問題ない。

「遅れましたー」

九時三十分丁度に教室の戸を開けた。そこには真面目にテストを受けるクラスメイトの姿が……

「吉井君、私と結婚してくれるのでしょうか？」

「いえ、それは……あのー、そのー」

「はっきりなさい」

否、一人だけ違った。船越女史に求婚を迫られて、汗をダラダラ流す明久の姿がある。よく、よく見ると姫路を除く、クラスメイトが必死に笑いを堪えている。

まったく、仕方ない奴だな。

「先生、昨日の件の事でしたら、ウチの近所に住んでいる、独身男性の紹介ですよ」

「あら、そうなの？ 吉井君」

「は、はいっ！ そうだった。僕の近所にですね、独身のお兄さん？ を紹介しようと思っていたんです」

「まあ、ありがとう」

明久が船越女史に近所のお兄さん？ の住所を教える。船越女史はとても分かりやすい程に喜びを顔に浮かべ、教卓に戻っていく。

（颯介！ 助かったよ）

（なに……礼を言われる程じゃないさ）

明久と目で会話する。ま、あのままだと本当に結婚してたかもしれないね。それはそれでまた、面白いのだろうけどな。そう思いつつ、一時間目は飛ばして二時間目からテストを受けた。

「やっと、昼か……」

退屈なテストが終わり、昼休みの時間だ。

「雄二。昼飯食いに行こうぜ」

「そうだな。今日はラーメンとカツ丼と炒飯とカレーにすっかな」

「毎回、思うんだけどさ。よくそんなに食えるよね」

「そうか？ 普通だと思うが」

「いや、明らかに一食分のカロリーじゃないんだけど……」

「別にいいだろ。ほら明久、行くぞ」

雄二は俺の言葉を気にせず、未だ机に突っ伏している馬鹿に声を掛ける。

「ん？ 吉井達は食堂に行くの？ だったら一緒にいい？」

「別に構わないよ」

「それじゃあ、混ぜてもらおうわね」

「……（コクコク）」

康太が賛成の意思を示すが、おそらく色気目当てだろうな。島田に――おっと、これ以上は考えるのはよそう。

「吉井、なんかウチの悪口考えてない？」

「滅相もございません」

明久が考えてはいけない事を考えたらしく、島田に追求され、ぐさまた下座だ。最近、島田はエスパーじゃないか？ と思う程に勘が鋭くなってきた。

「じゃ、僕も今日は贅沢にソルトウォーターあたりにしようかな」

「明久、カッコよく言ってもそれはただの塩水だろうが」

「う、うるさいなっ！」

「あ、あの。皆さん……」

明久に真実を突きつけながら学食に行こうとしたとこれで声をかけられた。

「うん？ あ、姫路さん。一緒に学食に行く？」

「あ、いえ。え、えっと……、お、お昼なんですけど、その、昨日の約束の……」

姫路は歯切れ悪く、俺達の方に話しかけてくる。約束ってなんだ？

「おお、もしかや弁当かの？」

「は、はいっ。迷惑じゃなかったらどうぞっ」

と、身体の後ろからバックを出してきた。へえ、弁当か……、食費が浮いてラッキーだな。

「迷惑なもんか！ ね、雄二！」

「ああ、そうだな。ありがたい」

「そうですか？ 良かったあ」

明久に食べて貰えると分かると嬉しそう笑う姫路。

「むー……っ。瑞希って、意外と積極的なのね……」

（ノロノロしてると先を越されるぞ？）

明久を仇のように睨む島田の後ろに立ちボソリと呟いてやった。

（――っ！　　な、何を言ってるのよっ。吉井の事なんか何とも思
ってないわよ！？）

（はい、はい。そういう事にしておきますよ）

気づいている奴はもう気づいていると言うのに、強情な性格だよな。

「それでは、せっかくのご馳走じゃし、こんな教室ではなくて屋上
でも行くかのう」

「それは名案だね」

こんな最悪な場所ではなくて晴れ晴れした所で気持ちよく食べたほ
うが良いしな。

「そうか。それならお前らは先に行行っててくれ」

「ん？　雄二はどこか行くの？」

「飲み物でも買ってくる。昨日頑張ってくれた礼も兼ねてな」

「あ、それならウチも行く！　一人じゃ持ち切れないでしょ？」

と、島田が名乗りでる。雄二に確認でもすんのか？

「悪いな。それじゃあ頼む」

「おっけー」

雄二はそれを快諾する。

「きちんと俺達の分をとっておけよ」

「もちろんだ」

「じゃあ、任せた」

雄二と島田は財布を持ち教室から出ていった。

「そんじゃ、俺らも行くとしましよう」

「そうじゃな」

屋上へと歩く。明久の方を見てみると姫路の抱えていたバックを運んでいるようだ。なんというフラグメイカーだ。

「天気が良くてなによりじゃ」

「そうですねー」

屋上へと続く扉を開けるとサンサンと眩しい太陽が目に入る。

「あ、シートもあるんですよ」

姫路はバックからビニールシートを取り出し下に敷く。偶然的に屋

上には人がいなくて俺らだけだ。

「あの、あんまり自信はないんですけど……」

姫路が重箱の蓋を取る。

『おおっ！』

俺以外が一斉に歓声をあげる。

なぜだかこの時、俺の脳裏にADV（通称……ギャルゲーなどの部類）の弁当イベントがよぎった。ヒロインの料理が壊滅的に不味いという、イベントだ。

いや、いや、さすがに壊滅的な味というのは二次元の話だ。疲れてるのかな……俺。

「それじゃ、雄二には悪いけど、先に――」

「……………（ヒョイ）」

「あつ、ずるいぞムツツリーニっ」

康太が素早くエビフライをつまみ取った。そして、流れるように口に運び――

「……………（パク）」

バタン

ガタガタガタガタ

豪快に顔から倒れ、小刻みに震えだした。

「「「……………」」」

男子、俺らは顔を見合わせた。

「わわっ、土屋君!？」

姫路が慌てて、配ろうとしていた割り箸を落とした。

「……………（ムクリ）」

康太が復活した。

「……………（グッ）」

そして、姫路に向けて『凄く美味しい』と言う風に親指を立てる。

「あ、お口に合いましたか？　良かったですっ」

貴女は未だに彼のガクガクと震える足を見ておかしいと思わないんですか!？

「良かったらどんどん食べて下さいね」

姫路が笑顔で勧めてくる。だが、その笑顔の勧めるまま食せば康太の二の舞だ。まさに死の宣告に等しい。

「俺、ちょっと雄二達見てくるよ」

ダッ (全力で逃げ出す音)

ガシッ (明久と秀吉が俺の両腕を掴む音)

ズルズル (明久と秀吉が俺を引きずり戻す音)

(逃げるなんて卑怯だよ。颯介)

(そうじゃ、一人だけ助かろうなんて駄目じゃ)

(無理、無理。あんなん食ったら、昇天するって)

表情は笑顔のまま姫路に悟られることなく、小声で会話する。

(じゃあ、二番手は颯介だね)

(ふざけんな! だったら、明久が食う手本見せろや!)

(何その屁理屈!?)

俺達が『お前、先に逝けよ』合戦になっているところで、

「おう、待たせたな! へー、こりゃ旨そうじゃないか。どれどれ?」

我らが代表、雄二登場。

「あつ、雄二」

明久が止める間もなく素手で卵焼きを口に放り込み、

パク
ガタ

ボタン——ガシャガシャン、ガタガタガタ

ジュースの缶をぶちまけて倒れた。

「さ、坂本！？　ちよつと、どうしたの！？」

遅れて来た島田が雄二に駆け寄る。……速く、逃げ出してえええー
ー。明久が激しく震える雄二を見た。

雄二がこちらを見て、目でこう訴えた。

『毒を盛ったな』と。

明久がコンタクトを取り、雄二はよろよろと起き上がり、

「あ、足が……つってな……」

姫路を傷つけないようにウソをついた雄二。馬鹿か！？　ここは
姫路を傷つけてでも不味いと言うべきだろうが！　ここで残酷だ
が真実を伝えた方が姫路のためになる。

俺そう決心し姫路に向かって、

「姫路、申し訳無いんだけどさ、このお弁当——」

「あっ！ 皆、アレはなんだ！？」

「えっ？ なんですか？」

「どこよ？ 吉井」

真実を告げようとした所で明久が明後日の方向に指を指して、姫路と島田の視線を逸らした。

（どりゃあっ！）

（もごおおっ！？）

その一瞬

雄二に姫路の弁当を無理矢理、口の中に押し込まれ

その次に明久に俺の顎あごを掴まれて咀嚼そしゃくさせられ、胃の中に入っていく。

俺は甘すぎず、辛すぎず、苦いわけでもなく、少し酸味が効いているようでないような、この世の味では無い味を感じながら、意識が遠のいていく。

皆……連邦軍は何でガンタンクなんか開発したんだろうか………？

第六問 【試験召喚戦争】その6（前書き）

問 次の文章の（ ）に正しい言葉を入れなさい。

『光は波であって、（ ）である』

姫路瑞希の答え

『粒子』

教師のコメント

よくできました。

土屋康太の答え

『寄せては返すの』

教師のコメント

君の解答はいつも先生の度肝を抜きます。

吉井明久の答え

『勇者の武器』

教師のコメント

先生もRPGは大好きです。

長尾颯介の答え

『メガ粒子砲』

教師のコメント

ガンダムも大好きです。

第六問 【試験召喚戦争】 その6

ピリリッ！ ピリリッ！

この音は俺の携帯の着信音だ。手探りで携帯を取り、開いた。画面に表示には電話着信やら、メールやらとたくさん、溜まっている。とりあえず、現状確認だ。

確か、昨日は姫路の殺人弁当によって倒れて、保健室で放課後まで眠っていた。その後、明久が迎えに来ていっしょに帰って。俺はいつも通りに深夜までゲームをやって寝た。

そこまではいい。だが、何か忘れているような気がする。何だっけ？ 考えながらメールを開いてみる。

《送信者…雄二

題名…無題

本文…早く来い！！

今日はBクラスと試召戦争だぞ！？》

あっ！

『颯介、明日、Bクラスと戦争だから遅刻しないでよ？』

『分かってるさ』

昨日の明久との会話を思い出した。今、何時だ？携帯の時刻を見つめる。

現在の時刻：P M 3..55

やっちまった……………とにかく……………

「急げええええっ!!」

心の底から叫び、制服に着替えて学校に向かう。

「ハア、ハア。ふうー」

全力で駆けつけた結果、息が絶え絶えになった為、深呼吸で整える。そして、階段を昇っていく。

三階に着くとやけに静かだ。戦争をしているなら、かなり騒がしいはずなのだがな。お、優子だ。隣に女子が大丈夫だろう。とにかく、Fクラスがどうなったかが知りたい。

「優子。FクラスとBクラスの試召戦争はどうなったか知ってるか？」

「何？ アンタ。今、登校してきたの？」

優子は呆れたような目をして、聞いてきた。

「あはは……まあ、そうだけど」

笑って誤魔化すしかない。

「……長尾……颯介……？」

「ん？ ああ、そうだけど」

優子の隣にいる女子に話しかけられた。よくよく見ると初日で俺の顔を見てビックリしていた少女だ。

「……これを知っている？」

少女が制服のポケットから色あせたハンカチを取り出す。優子は何がなんだか、分からないという表情をした。だが、俺には見覚えがあった。誕生日に母から貰ったハンカチに似ている。そういや、あのハンカチは毎日使う程に気になっていたな……

「まあ、似たようなハンカチは昔持ってたけど……そのハンカチがどうかしたか？」

「……やっと……見つけた……」

少女はそう言いながらボロボロと目から涙を流す。

「だ、代表!?! 颯介! アンタ何したのよ!?!」

「俺が逆に聞きたいんだけど」

まったくもって意味がわからない。そもそも、今日初めて話したんだぞ?

「優子……頼んだ!」

このままだと俺の生命が優子によって消される恐れがあるのでここは一旦引こう。

「あ、コラッ! 待ちなさい」

優子の声を無視し、我がFクラスへ避難する。避難する途中で廊下で消火器を使った後があったが気にすることなく通り過ぎ、Fクラスに飛び込む。

「遅いよ!」

教室に入るなり明久が殴りかかってくる。俺はその拳を受け止めて、市販の催涙スプレーを噴射した。

「ギャーッ! 僕の目があああああっ!?!」

明久が目を押さえながら転げ回る。護身用の物と言えど効果は抜群だ。

「雄二。試召戦争は?」

「まだ、戦争中だ。お前が来なかったせいで計画が少し狂ったがな。今日のところは解散しようと思ったところだ」

見た感じ、雄二は怒っている感じはしない。

「長尾。明日はちゃんと来なさいよ」

島田は手を腰に置いている。どうやら若干怒っているみたいだ。

「もちろん。今日みたいなヘマはしないさ」

今日は学校に來ただけの徒勞となったが、明日はちゃんとしよう。

「今日は間に合ったな」

なんとか、いつもより早く登校することができた。現在の時刻は九時十分前だ。Cクラスの教室を横切ろうとすると、ドアが開き優子が出てきた。

「Cクラスになんか用でもあったのか？　優子」

「ん？　颯介。姉上じゃない。ワシじゃ」

優子では無く女装した秀吉だった。共にFクラスに向う途中に雄二と明久を見つけた。

「何をしたんだ？」

何故、秀吉が女装姿である理由を雄二に聞く。

「昨日、CクラスがBクラス戦の後に俺らに仕掛けてくるとわかったからな。秀吉をAクラスの使者になりすませて向かわせた」

『Fクラスなんて相手にしてられないわ！ Aクラス戦の準備を始めるわよ！』

Cクラスから女子のヒステリックな叫び声が聞こえた。秀吉を優子になりすませた……ね……

「秀吉……優子に殺されんぞ？」

そうとう酷い事を言わなきゃ、こんなヒステリックな声にはならない。

「そうじゃが……お主を身代わりにすれば助かるじゃろうな」

俺を生け贄にしようと言うのか！？ 悪魔め！

「作戦もうまくいったことだし、俺達めBクラス戦の準備を始めるぞ」

「オツケ」

秀吉の話は聞かなかったことにしよう。今はとにかくBクラス戦に集中せねば。

「お前らは俺が取りこぼした奴らを相手しろ！」

俺の部隊に指示を飛ばす。午前九時からBクラス戦が開始され俺達はBクラス前で進軍している。雄二からは敵を教室に閉じ込めろと命令された。

Bクラスの左出入口が俺の部隊、右出入口が姫路の部隊となっている。

「また、一人撃破！」

俺は戦争が始まってから5人位を地獄と言う名の補習室に送りこんでいる。だが最前線で戦っているため、550点位あった古典の点数が340点位になっている。

そろそろ、補給しないと文系が得意なBクラスの相手は厳しい。補給に行くか……

「颯介っ！」

「なんだ？ 明久」

戦闘中に明久が後ろから話しかけてくる。

「姫路さんは戦えないからここは全部颯介がカバーして欲しいんだ」

姫路が戦えない……？

言っている意味がわからない。

「理由は？」

戦闘に集中しつつ、明久に聞き返す。

「理由は言えない」

「……少しキツイがやってやるよ」

断ろうとしたが明久の真剣な表情をみたら断れねえじゃねえか。

「ありがとう。颯介っ！」

明久はそう言うなり、体を翻し去って行く。

「隊長！ 先ほど言われてきた物を持って来ました！」

細長いホウキを持ったクラスメイトが来た。さっき、俺がホウキを持ってくるよう命令したからだ。

「第一部隊は突撃だ！ 奴らを入り口まで押し戻せ！」

「了解っ！」

返事と共に俺らの部隊は無理矢理、破竹の勢いのようにBクラス入り口前まで突撃する。

「ドアを閉めてホウキで開かないようにしろっ！ 力のある奴はドアを押さえてろ！ よし、命令があるまで絶対に開けるな」

クラスメイトの一人がBクラスのドアを閉め、ホウキで閉じ込める。

それにプラス4、5人がドアを押さえる。これで使えるドアは右側だけだ。クラスメイト達は廊下に取り残されたBクラスを狩る。

「颯介。状況はどうなっている？」

「雄二か。左の入り口は封鎖した」

雄二の部隊がこちらにやって来た。

「そうか。三時になるまで現状維持をするぞ」

「わかった」

三時になるまで後三分といったところだ。何かの作戦か？

『お前らいい加減諦めろよな。昨日から出入口に人が集まりやがって。暑苦しいことこの上ないっての』

Bクラスの中から男子の声が聞こえてきた。

「どうした？
軟弱なBクラス代表サマはそろそろギブアップか？」

雄二はその言葉を聞いて挑発をする。Bクラス代表は確か根本だったか？

『はア？
ギブアップするのはそっちだろ？』

「へえ、男子の中で成績トップを相手にして。よくそんな事が言え

るなネクラ野郎」

今度は俺が挑発する。根本が相手なら容赦しない。

『ハッ！ お前がいたって戦力はこちらが上なんだよ』

「戦力差がどれ程あろうが戦争するのはやり方次第で勝つことが出来るのさ」

『その強がりを持ち砕いてやるよ。お前ら、一気に押し出せ！』

俺の挑発に乗った根本はBクラスに指示を出す。

「……態勢を立て直す！ 一旦下がるぞ！」

『どうした、散々ふかしておきながら逃げるのか！』

雄二の命令で俺らは次々とFクラスに逃げる。

「あとは任せたぞ、明久」

去りぎわに雄二はそうはっきりした声で言いはなった。その直後だ。

『だああーっしやああーっ！』

明久の魂の雄叫びがDクラスから響いて聞こえる。

ドゴォッ

更に壁が壊されたと思われる音も聞こえた。もしや、奇襲を狙ったのか。

『ムツツリイニーーッ!』

数分も経たないうちに根本の叫び声が廊下中に響いた。

「康太がやったのか？」

「ああ、そうだ俺達の勝ちだ。颯介」

Bクラス戦はこの瞬間をもって終了した。

第七問 【試験召喚戦争】その7（前書き）

問 最近「北極海の海水が甘くなった」という記事の見出しを見ました。

（1）原因と考えられる事は何か説明しなさい。（2）また、この事が今後どのような影響をもたらすか記述しなさい。

姫路瑞希の答え

（1）『原因は北極海の氷が溶けて海水の塩分濃度を薄めているから甘く感じる要因になっている』

（2）『北極海の氷が溶ける事によって海面が上昇し、世界中の島が沈んでいく事が考えられる』

教師のコメント

その通りです。我々人間が欲望のままに行動した結果、こうした事が起こったのです。

長尾颯介の答え

（1）『誰かが大量に砂糖を入れたから』

教師のコメント

砂糖を入れたのではありません。

吉井明久の答え

(2) 『北極海で遭難した時、砂糖水を飲めば、生き延びる確率が上がるということが考えられる』

教師のコメント

海水が砂糖水になったわけではありません。

第七問 【試験召喚戦争】 その7

「誰か大胸筋サポーター持っていないか？」

「あるぜ。ほら、長尾」

Bクラスの男子からブラジャーに見える、サポーターを受け取る。そのサポーターを負け組代表の気絶している根本に装備させる。

そして、女子の制服を着せる。もちろん、スカートは膝より上のミニスカ状態にしておく。おええ、恐ろしい程に似合っていない。

「それでコイツをAクラスに行かせれば、私達はFクラスの教室にならなくて済むのね？」

「ああ、そうだ。後それにプラス撮影会もだ」

Bクラスの女子と雄二の話し声が後ろから聞こえた。そう。教室を交換しない代わりにAクラスに戦争する意思があると伝える――という条件を呑んだのだ。

Aクラスに伝えに行くのは女装した根本だ。当然、根本は嫌がっていたがBクラスの皆さんの総意で決行されることとなった。

これはかなりの精神的苦痛を受けることとなるだろう。俺も昔、玲さんに強制的に女装させられたことがある。その時の思いといったら、それはもう死にたくなる程だ。

「こんなもんだな。さて、やることやったし帰るかな」

「おう。ご苦労だった」

「雄二もな」

雄二とそう言葉を交わし、俺はカバンを持って教室から出ていった。いつもの階段、昇降口を通過って校門から出ていこうとすると、

「待ってたわよ。颯介」

校門前にいらっしやった優子に声をかけられた。ああ……嫌な予感がするなあ。

「な、何よその顔は？ 別に何もしないわよ！ 今日一緒に帰ろうと思って待ってただけよ」

「何も言っていないから。ほら、行こうぜ」

「あ……うん……」

優子と並んで帰り道を歩く。いつもなら、優子が何か話してくるはずなのだが、今日は珍しく黙っている。ちらりと横顔を見ると何か思い詰めた表情をしている。

「親に乙女小説でも読まれたのか？」

優子がこんな表情を浮かべるとしたらこれしか心当たりがない。

「私がそんなヘマをするわけじゃないじゃない」

「あゝ、そうですか」

「「……………」」

なんとか、話を弾ませようとしたが、会話が途切れてしまい、互いに沈黙する。コイツ本気で何か悩んでいるのか？　どうしようかと考えていると、

「あ、あのさ、アンタってさ、誰かを好きになったことってある？」

優子は若干頬を赤く染めて話を切り出してきた。優子が恋について話をするとは明日は雨でも降りそうだ。

「いきなり、なんだよ？　惚れた奴でもできたのか？」

「ま、まあ、そんなところよ。で、あるの？　無いの？」

驚きだ。乙女小説大好き人間が現実には振り向くなんて。だが、そんなからかうような考えはすぐに消えた。なぜなら、優子の瞳は至極、真剣だったからだ。

「昔、好きな奴はいたよ。今は友達というところかな」

「昔……？　というと今はいないんだ？」

優子にはこやかに疑問をぶつけてくる。何が嬉しい！？

「まあ、そうなんだけど。なんていうか、女の子を見て、可愛いなあとかは思うんだけどな。本気で好きな奴ってのはいないんだな」

ふう。今、考えるとかなり恥ずかしいセリフだな。これだから恋話は苦手なんだよな。

「ふーん。あ、昔の好きだった人はいつから好きじゃなくなったの？」

女子ってホント、人の恋話好きだよねえ。あー、一気に終わらせるか、背中がむずむずするし。

「……………フラれた。好きな人がいるから、無理ですって言われて、俺の初恋終了」

つーか、あの頃の俺ってよく告白なんてする気になったよな。冷静に思い返せば恥ずかしい思い出だな。

「そ、そうなんだ……告白して後悔した？」

「質問ばっかだな……後悔ね。フラれてから少し落ち込んだけど、すぐに立ち直ったぜ」

フラれなきゃ、神ゲーに会えなかっただろうしね。フラれたから今の自分がいると言っても過言じゃないな。

「じゃあ、最後の質問ね。今、誰かに告白されたらどうする？」

優子の翠色の瞳はしっかりとこちらを向いている。

「さあ？ そのときにならないと分からないな」

現実でゲームみたいなシチュエーションを体験するとしても俺は困惑するだろう。ゲームの中のシチュエーションは空想だからいいのだ。

「そ……」

「で、優子の好きな奴ってどんな奴なんだ？」

これだけ話したんだ。少し位聞いてもいいだろう。

「へ……？ あっ、わ、私こっちの方だからここでさよならね！」

「はあ？ もう少し先の十字路だろ？」

「そ、それじゃあね……！」

優子はそう言うなり、慌ただしく走り去っていった。全く意味の分からない恋愛相談だったな。

ん？ 恋愛相談？ フラグか……？ はっ、無い無い。何で

もかんでも、ゲームと重なるなんて俺もおかしくなってきたかな。

おかしい頭を治すために今日は早めに寝るとするか。

「まずは皆に礼を言いたい。周りの連中には不可能だと言われているにも関わらずここまで来れたのは他でもない皆の協力あってのことだ。感謝している」

雄二は壇上でクラスの皆をまとめるために演説っぽい事をしている。独裁者の才能がかなりあるんじゃないかね？

「颯介。一昨日から姉上の様子が変なんじゃが何か知っているかう？」

「相変わらずの可愛さだな秀吉」

小声話しかけてくる姿に惚れそうだ。いつそのこと抱きしめたい。

「わしの可愛さじゃなくてじゃな……姉上の事をきいておるのじゃ」

「俺が知るわけがないだろ。アイツが変なのはいつもの事じゃないか」

自分勝手だしね、学校で猫を被ってるとか、いろいろあるじゃん。

「その物言いは少し酷いと思うのじゃが。うーん。姉上は——颯——の——きだと思う——じゃが……」

秀吉はぶつぶつと他人には聞き取れない声で独り言を呟く。

「馬鹿の雄二が勝てるわけなああっ!？」

明久がいきなり叫んだので見てみると頬から血を流している。ふむ、あのカタターか。

「次は耳だ」

「いやいや、眉間だろ」

「僕か死んだらどうするつもりさっ!？」

そんなときはアレだ……

「明久のゲームソフトは俺が責任をもって貰っておくよ」

「酷っ！ 故人の所有物を横領するとか颯介なんか友達じゃないよっ」

アレだけの数だ。売れば結構お金になるとおもうんだが。

「まあ、明久の言うとおり確かに翔子は強い。まともにやりあえば勝ち目はないかもしれない」

翔子って誰？ 話が見えん。こういう時は……

「康太。ここでの翔子の情報を……」

「……………写真付きで千五百円」

高いがこれも情報の為だ仕方ない。財布からお金を取り出し渡した。康太は金額を確認する。

「……………霧島翔子。Aクラス代表で学年順位で常に首席、彼女にしたいランキングで男女問わず堂々の一位、異性には一切興味無いらしくおそらく百合かと思われる。家柄は裕福で一般に言うお嬢様。最も親しい親友は現在確認する所、木下優子と断定。スリーサイズは分からないが推定〇〇・〇〇・〇〇だ。そして、これが霧島翔子だ。」

弱固有結界を発動した康太からかなりの情報を得る事ができた。写真を見てみるとかなり覚えがあった。

「コイツって……」

あの時突然泣いた奴だ。そういや優子が代表って言っていたじゃん。気づけよ俺……。

「さて、具体的なやり方だが……——」

雄二がまだ何か喋っているがもう俺は眠くて話が追いついていけない。というわけで腕を枕代わりにして寝ることにした。

「では、両名共準備は良いですか？」

知的メガネのAクラス担任の高橋女史がそう言う。俺が寝ている間にAクラス戦が決まったらしい。

ルールは一騎打ち五回で先に三勝したクラスが勝ち。Fクラスは三回の科目選択権を得た。これなら、少しは勝ち目があるかもだな。

「ああ」

「……問題ない（チラッ）」

両クラス代表が応答する。霧島はさっきから俺の方をチラチラ見て

いて落ち着きがない。

「それでは一人目の方、どうぞ」

「俺が行こう」

先に一勝する自信は満々だ。Aクラスは誰が出てくるか。

「アタシがやるわ」

「優子か……悪いがこの勝負は勝たせてもらう」

Aクラスのスイートホームを手に入れるために敗者となってもらおう。

「アタシは負けるつもりなんてさらさらないから」

「科目は何にしますか？」

「「国語だ（物理で）」」

優子と見事に声が被った。物理とか冗談じゃないぞ。俺が負けちゃう。

「じゃんけんで科目選択権を決めましょ」

「いいだろう」

勝率八十パーセントの俺の力を見せてやる。

「「じゃんけんぽんっ！」」

俺……グー

優子……パー

負けた……この試合負けたな……

「では科目は物理ですね」

もうどうとでもしてくれ。

「試獣召喚！」

「はぁ……試獣召喚……」

『Aクラス	木下優子	VS	Fクラス	長尾颯介	物理
412点	VS	152点	』		

ほら見ろ。250点も差があるし。

「アンタの召喚獣って死神そのものね」

「馬鹿にしゃがって」

優子の召喚獣は西洋の鎧を身に纏い武器はランスだ。俺も大鎌じゃなくてそんなカッコイイ装備がいいなあ。

「颯介。この試獣戦争が終わったら……そのつ、ちょっと話があるからね」

「話？」

「そつ、それじゃあ行くわよっ!？」

ずるっ!! 完全なる不意打ちじゃん。俺も集中しないと。

優子がランスで連続で突いてくるのを俺はその攻撃を華麗に大鎌で防ぎ、徐々にこちらのペースで攻め——————られませんでした。

最初の二、三回は防げたんだけどね。それ以降パワーで押されて最終的には攻撃をくらって戦死した。

「まずはAクラスの一勝ですね」

高橋女史がそう言い大画面に俺の負けが記される。かなりへこむ。

「では、次の方どうぞ」

「ウチが出るわ。科目は数学でお願いします」

「じゃ、私が相手します」

Fクラスは島田。Aクラスはえくと……

「それでは始めて下さい」

『Aクラス	佐藤美穂	VS	Fクラス	島田美波	数学
394点	VS	186点	』		

佐藤と言う名前だ。島田も俺と同じくパワーで押されて戦死した。もうこれで後が無くなった。

「では三人目の方どうぞ」

「……………（スック）」

康太が立ち上がった。となると科目は保健体育だな。

「じゃ、ボクが行こうかな」

Aクラスからは一人称がボクの子が出てきた。萌える。

「一年の終わりに転入してきた工藤愛子です。よろしくね」

身体の凹凸が少ない。なんかスパッツ履いてそうな子だ。

「教科は何にしますか？」

高橋女史が康太に尋ねる。

「……………保健体育」

「土屋君だっけ？ 随分と保健体育が得意みたいだね？」

随分と余裕そうな喋り方だな。

「でも、ボクだってかなり得意なんだよ？ ……キミとは違って、実技で、ね♪」

実技だとおおおっ!? まさか、あっちなのか! ○○○の方なのか!?

「颯介。何を考えているのかなあ」

「え? もちろん。工藤の実技というのを想像、し、て、いてえええっ!?!」

痛い痛い痛い。折れるってコレっ!?

「ホント、最低ね」

優子にギリギリと未だに曲がらない方向に腕が捻られ続けて観戦どころじゃない。

「何で優子が怒っていんだよ。痛い痛いマジ勘弁してっ!」

「黙りなさいっ!」

地獄がまだ続く。そんな中外野から声が聞こえる。

『う、羨ましい!』

『クソッ! 何で長尾ばかりっ!』

なんならお前等、俺と代わってくれよ! ちよつと! 皆、俺を無視して試合を進めていんじゃないやねえよっ!!

ああああっ、もうっ! バカばっか!!

第八問 【試験召喚戦争】その8（前書き）

問 有名な作家であるスタンダール、太宰治、森鷗外の商品名をそれぞれ一つずつ答えなさい。

長尾颯介の答え

『（1）赤と黒（2）斜陽（3）舞姫』

教師のコメント

その通りです。ぜひともこれらの素晴らしい作品を読んで頂きたいものです。

吉井明久の答え

『（1）スタンとダール（2）走れパシリ（3）愛媛』

教師のコメント

作者に謝ってください

土屋康太の答え

『（1）エロとエロ（2）走れエロス（3）SM嬢』
教師のコメント

あなたの頭の中はそれだけですか……

第八問 【試験召喚戦争】 その8

「最後の一人、どうぞ」

「……はい」

俺が優子から私刑を受けている間に最終決戦になっていた。え〜と、あの子は霧島だっけ？ 学年首席の。

「さて、俺の出番だな」

Fクラス代表は当然、坂本雄二だ。

「教科はどうしますか？」

確か秀吉から聞いた話だと、

「教科は日本史、内容は小学生レベルで方式は百点満点の上限ありだ！」

そう、それだった。霧島は大化の改新の年号を間違えて覚えていると聞いた。う〜ん、不安だ。小学生レベルとはいえ勉強していない奴が高得点を取れるとは思えないのだが。

「わかりました。そうなると問題を用意しなくてははいけませんね。少しこのまま待っていてください」

高橋女史が教室が教室から出ていく。学年主任だからあらゆるレベ

ルのテストの資料を持っていそうだな。いや、持っているだろうな。
高橋女史と鉄人のテスト点数は学園内トップだしな。この事は鉄人に興味本位で聞いたところ教えてくれた。

おっと、雄二に明久達が激励を贈っている。俺も何か言っておくか。

「雄二、信じてるぜ」

「ああ、任せろ。そういや颯介、これから頑張れよ」

「何をだよ？」

雄二の言った意味が分からない。頑張れって……何か頑張らないといけない事があるのか？

「まあ、その内判明するさっと、出番が来たか」

どうやら、高橋女史がテストを作り終えたみたいだ。雄二と霧島はテスト会場である視聴覚室に行く。

「皆さんはここでモニターを見ていて下さい」

高橋女史が機械を操作すると、壁のディスプレイに視聴覚室の様子が映される。

「何で小学生レベルの問題を選ぶなんて何か勝つ作戦でもあるの？」

「それは見てからの楽しみという事で」

「教えてくれても良いじゃない」

「ほら、始まったぜ」

テストが開始し、問題が画面に映される。負けたらブタ小屋になり、霧島からの罰ゲームを受ける。雄二……勝てよ。

《次の（ ）に正しい年号を記入しなさい。》

（ ）年 平城京に遷都

（ ）年 平安京に遷都

俺には楽々な問題だ。これなら、出るかな……？

（ ）年 鎌倉幕府設立

（ ）年 大化の改新

出、た……。

「よっしやああああっ！」

気づけば俺はFクラスの皆と一緒に歓喜の声を挙げていた。

《日本史勝負 限定テスト 100点満点》

《Aクラス 霧島翔子 97点》

VS

《Fクラス 坂本雄二 53点》

………は？

「三対二でAクラスの勝利です」

そんなこと言われなくても分かってますよ高橋女史。

「……雄二、私の勝ち」

床に膝をつく雄二に霧島が歩み寄る。

「……殺せ」

「良い覚悟だ、殺してやる！ 齒を食い縛れ！」

明久が怒りに狂っている。もういいや……帰ろう。俺はドアからこっそり――

「颯介、どこへ行くのよ？ アタシとの約束があるでしょ」

——としたけど優子にがつちりと腕を掴まりました。

「話なら今ここで済ましてくれ。俺はもう早く帰って寝たい」

「え……ここで……？」

優子はたじたじし始めた。何か都合が悪いのだろうか？　そして、一呼吸して息を整え、小声で話しかけて来る。

「い、一度しか言わないからよく聞きなさいよ？」

「ああ、とにかく早くしてくれ」

「う、うん。あ、アタシはね……」

うん、アタシは……？

「あ、アンタの事が、颯介の事が好き。だ、だから、恋人として付き合って……」

「え……？」

今、優子は何と言った？　聞き間違えてなければ俺の事が好きだと言った。優子が……俺の事を……？

息が詰まる。

喉の奥が急速に乾く。

体が熱く、心臓が早鐘のように鳴り響く。

『と——で——や——く』

『わか——て——る——で——言え』

『——それ——やあ——』

気が動揺して周りの声がよく聞こえない。俺は優子の言った事を頭の中で繰り返す。優子は顔を真っ赤にし俯いている。

「ダメ……かな……？」

「あ……う……」

優子の声は微か震えていた。何か……何か言わないと……。だが俺は何を言えば良いか分からない。

「……颯介」

「代表？」

別の声が聞こえた。声の主は霧島だった。

「……私と付き合ってほしい」

「……う、え……？」

ちょっと、待てよ。優子にも告白されて、関わりが無い霧島にも告白されて……頭がパンクしそうだ。落ち着くために深呼吸だ、俺。大きく息を吸って、ゆっくりと吐く。よし、大分思考がまともにな

ってきた。

『ほらな、姫路には迷惑はかからないだろ?』

『うん。でもさ、秀吉のお姉さんも様子がおかしいけど?』

外野の声も鮮明に聞こえる。改めて、冷静になった思考を開始させよう。

優子が俺の事が好き。

霧島も俺の事が好き。

今二人に告白された。

これから、導かれる答えは……返答しだいでナイフでメッタ刺しにされる。

——って……ちがーうっ!! ゲームが混じってるしっ!

「代表も……なんだ。アタシじゃ無理だね……」

「……優子。命令を変える」

そう、これはリアルなんだバーチャルじゃない。どうしたら良いんだよ!?! どちらにせよ片方が傷付くし……

「……颯介、私と優子と付き合って」

「え……代表。いいの? それで?」

「……うん。優子は私の一番の親友だから」

ダメだ！ どの選択肢を選んでもバットエンドしかねえ。

『『『なんだとおおっ！？』』』

クラスの皆が大声を挙げていたので我に返り、周りを見渡す。

「へ？ 何々？ どうかしたのか？」

「アンタ、何も聞いてなかったの？」

「は？ だから何を？」

シュミレートするので一杯だったから何も聞こえなかったな。

「……私達と颯介は付き合う事になったこと」

「え？ ええええっ！！」

何それ！ 三角関係エンドかよ！

「……早速、颯介の家に行く」

「えっと……これからよろしくね。颯介」

「ちよっ！ 俺に少し考える時間を――」

「……颯介には与えない」

基本的人権の侵害だよっ！ それ！ え、マジで家、来んの？
引
きずらないで！ 二人共――！

我が家に帰って来ました。霧島と優子を連れてね。

現在、二人のために台所で麦茶をコップに注いでいます。

『……ソフト?』

『これって、い、いやらしいゲームよね?』

隠してあるゲームを見つけられたああッ!! 急ごう。

『……あ、また出てきた。………えいつ』

嫌な予感がするし。注ぎ終えた麦茶を持って二人のいる部屋へと向かう。

「二人共、勝手に部屋をあさら——何でソフトを叩き割ってんのっ!」

そこには無惨にも折られてしまった、俺の宝の残骸が散乱していた。

「未成年がやるゲームじゃないわよ。これ」

「……私達以外の女の子の振り向いちゃダメ」

霧島は更に割ろうとする。

「待て霧島、俺はそのゲーム達はLOVEの方じゃないLIKEの方だ。だから割るな」

「……翔子って呼んで」

名前でえ？ 一瞬困惑した俺の表情を見て、霧島は割る素振りを見せる。やらせてたまるかつ！

「翔子っ！ 割るなっ！」

「……うん（バキィィイツ！）」

「ノオオオオツ！！」

彼女達が翔子の手によって消え去ってしまった。なんという事だ……

「うわぁ……。何でこんな本を持ってるのよ？ ……凄い」

「だから、勝手にあさるなああッ！」

バキィィイツ！（翔子がソフトを割る音）

「お前もそれ以上割るなっ！」

「……うん、割るの頑張る」

「頑張らなくていいから！ 手を止めろ！」

バキィィイツ！（またもや翔子がソフトを割る音）

「無限ループじゃねえかよ！」

……しばらくループ中

「……………もう、死にたい」

もう俺の心はズタボロだ。必死になってなんとか止めさせたが被害総額は五万円にも上る。

「…………大丈夫、私が支えてあげる」

「アンタが加害者なんですけど!」

「あー、颯介、許してあげて。代表はちょっと、ぬけているところがあるから」

言わんでも今さっき身を持って知ったよ。悪意の無い害意だと玲さんよりたちが悪い。

「ああ。霧島に――」……翔子――翔子に聞きたい事があるんだが。接点も無い俺に何故、付き合おうとした?」

今一番の疑問はこれなのだ。

「…………昔、助けてくれた時に好きになった」

「へー、颯介がねえ」

昔ねえ……。玲さんの行動だけが強烈に記憶に残っているからなあ、他の記憶が曖昧なんだよなあ。

「……私が迷子になって転んで怪我した時に颯介が助けてくれた。その時にこのハンカチを貰った」

「前に見たハンカチだな」

翔子はハンカチを取り出した。そして、ハンカチを広げ掠れている名前の所を見せてくる。

「颯介の名前ね」

「うーん。昔……ハンカチ……人助け……」

後、もう少しで思い出せそうなんだよな。

『颯介、僕を公園に忘れてどこ行ってたのさ!!』

『ソウちゃん、アキ君を置いて行くとはいけない子ですね。罰として着せ替え人形の刑ですね』

ん……？ 何故、ここの記憶が浮かぶ!？

『……ありがとう』

恥じらいながらお礼を言う少女の顔が浮かんだ。その顔は翔子とよく似ていた。

「思い出したよ……うん。あの時の子か……」

「……思い出してくれたんだ。あの時からずっと颯介が好きだった」

「どうしたの？ 顔が真っ青になってきたけど？」

俺の様子の変化に気付いた優子が聞いてきた。

「翔子を助けて別れた後な……明久と公園で遊んでいたのを忘れて家に帰ったら、明久の姉に……酷い目に合わされた」

「あはははッ！ 何それ！」

「……颯介の忘れんぼう」

両者とも笑いだす。俺は全然笑えないからね。

『ソウちゃん、次はワンピースです』

『い、嫌だ！ もう許して！』

『そうですか……なら姉さんとキスした後で一緒にお風呂に入りましょう』

『ワンピース着ますッ！』

再生される記憶は止められず、二人が帰った後もずっとこの調子で思い出し続け、その日の夜は眠る事が出来なかった。

幕間【Aクラス戦後の休日】

——映画館——

Aクラス戦後の土曜。俺は翔子と優子と共に休日デート？　で映画館に来ている。現実で本人達の合意の上（俺の意思を無視して）とは言え、二股をしないのだろうか？　社会的に見ればすでに終わっているだろう。

こういうのはゲームの中だけだと思っていたんだがな。今ならハレム主人公の葛藤がわかるような気がする。

「……颯介、これを見よう」

翔子が指した映画を見してみる。

「ん〜なになに。『イタリーの闘争』、上映時間は二時間半……颯介。私もこれがいいな」

「イタリー……ね。あまり興味が——何をやる気だ？」

翔子がスタンガンを俺に押しあてようとするのを防いだ。

「……颯介に拒否権は無い」

「そうね。今日は私達を満足させてくれなきゃ」

「へいへい。わかりましたよ。んじゃ、購入してくるから待ってて

くれ」

翔子達を待たせて、鑑賞券を買いに行く。学割だから合計で三千円か……少し、痛いな。

「うう……三千円って……さらに飲み物やらで合計五千円近くの出費に……」

俺の横の受付で明久がお金の事で黄昏ながら鑑賞券を購入している。ああそうか、姫路と島田か。そういや、昨日その事で嘆いていたよ。うな気がしたな。

「『イタリーの闘争』学生三人分」

「はい。三千円になります」

財布から野口君を三枚出して、購入した。いざ二人のところに帰ろうとすると明久と目が合った。明久は某金融会社のCMに出てたチワワの真似をしてこちらをジッと見つめてくる。

「キモい。こっち見んな」

ついこの前も使った、催涙スプレーを明久の目に目掛けて噴射する。

「ノオオオオオオッ!!」

明久はあまりの痛さに目を押さえ、天に向かって咆哮する。

「用があるなら、単刀直入に言えよ」

「ちょっと……お金を貸してくれないかな？」

「今までに貸したお金は返って来た事がないんだが？」

そう、明久に貸したお金は決して返って来ない。その合計金額は現在、四万円位だ。

「絶対に返すから、お願いだよ」

その場で手を合わせて懇願する明久。俺はその必死さに免じて――

「じゃ、二人とも行こうか」

無視してさっさと劇場内に入る事にした。

『ちょっとおおお！　無視しないでよっ！　え？　本当に行っちゃうの！？　あ、ちょっと美波に姫路さん。やっぱり、僕の懐が軽いからさ、今日は割り勘にしてくれないと――僕の両腕が千切れる程、痛い痛いッ！！』

遠くから、明久の断末魔が響いて聞こえる。明久が島田と姫路に關節を無理に曲げられている光景が頭に浮かぶ。

「……凄い声」

「アレ、アンタの親友でしょ？　いいの？」

むう、先ほどのやり取りを見られてしまったらしい。

「いや、アレは親友と書いて漬物石と読むからな。体だけが頑丈な

生き物だ」

「……漬物石？」

「颯介、代表に分かりにくい喩えを言わないでよ」

「スマン、悪かった」

「……???」

翔子は何を言っているのか分からないというような表情で終始首を傾げていた。

そんな翔子を引き連れて優子と劇場内へと入って行った。

——ファミリーレストラン——

「……ユニークだった」

「ふふっ、ラストも笑えたしね」

「ああ、題名詐欺だなアレは。今年のアカデミー賞で賞を取れるんじゃないか？」

映画の内容は初めは戦記物かと思いついていたが、実際は笑いあり、

熱血ありの映画だった。

ジョナサンが熱くて俺も燃えた。ネットに書き込むならば、燃えるぞ危険！ のレベルだった。

「……颯介、あゝん」

「え……」

翔子は注文したパフェをスプーンで少しすくい口元に近づけて来る。

「……あゝん」

「それはちよつと遠慮したい……」

「……あゝん」

「や、だからね——」

「……あゝん」

俺の言葉を遮り、心なしか翔子の声が強くなっている気がする。いや、絶対強くなっている。

「あ、あゝん……」

「……うれしい」

公衆でこんな事をするなんて公開処刑に等しい。

「……おいしい?」

「ん、ああ、うまいよ」

スイマセン、恥ずかしさで一杯で味が分かりませんでした。

「ほら、口開けなさい」

「これ以上は出来ない」

優子も同じくスプーンですくったパフェを突きつけて来る。

「開けなさい」

「もう勘弁してくれ」

「むーっ」

頬を膨らまして絶対じゃんねえ。

「……優子、耳貸して」

「え、うん」

翔子が優子の耳に何かを囁く。そして、再び優子はスプーンを突きつけて来る。

「颯介……私のを……食べて……」

「……………」

「颯介え……」

やべえ……可愛い……甘い声といい、上目遣いとか反則だろ。

「あゝん」

「！ はい、あゝん」

思わず口が動いてしまった。ぬおおおっ！ 店員や客の視線がものすごく突き刺さる。

「「……………」」

二人共、顔を赤く染めながら食べている。うゝん、何か忘れているような……

「……颯介との」

「間接……キス……」

間接キスだ！ 完全に頭から抜けてたな。改めて考えると顔がだんだん熱くなる。

「顔、真っ赤だよ？」

「うるさいな」

顔の熱を冷やすためにアイスコーヒーを一気に飲み干した。

「……ファーストキス、どうしよう」

「グッ！ ゲホッ、ゲホッ！」

アイスコーヒーが少し気管に入ってしまった。

「一応聞くけどキスした事無いわよね？」

「な、無いに決まってるじゃん。今まで彼女が居なかったんだし」

「そうよね」

ふう、何とか乗りきれたな。本当はキスされた事があるだなんて言ったら修正されそうで怖い。

「……？ 汗がすごいけど？」

「い、いや、えーと、あ、二人共、あゝん」

話を逸らすために二人がした事を実践する。

「……あゝん」

「う、うん。あゝん」

二人共、ぎこちな動きでパクリと食べた。とっさの事とはいえど周りの視線がますます強くなって後悔した。

「次はどこ行こうか？」

「えゝ、まだ寄るの？」

「……まだ、満足してない」

えー、俺、もう家帰ってパソコン内の子と遊びたいんだけどなあー。

「今、アンタ、家に帰りたいと思ったでしょ？」

「いや、そんなことは一欠片も思っていないよ」

そんなに俺って分かりやすいかなあ？

「はい、それ嘘、颯介って嘘つく時、耳が赤くなるもの」

「え、マジで？」

そんな癖があったの俺？ うーん、耳を触ってもそんな感じがしないな。

「嘘よ」

「騙したな。優子。ホントに家に帰りたいというのがばれたとっ……」

「……思っていたんだ」

しまったあああっ！ 思わず口が滑った。

「じっくりとその性格を修正する必要があるわね」

「日本国憲法の精神の自由によって拒否します」

「ダメ」

優子の笑顔は天使という名の悪魔が浮かんでいた。

「……早く行こう」

「それもそうね」

二人に両手を引っ張られて精算してレストランを出た。この後の行き先で懷が寒くなるのがありありと想像できる。

「ほら、そんな陰気な顔をしないで！」

——だけど、たまにはこういう事も良いかもしれないな。

「……颯介にブローチやリングでも買ってもらおうかな？」

……だからといって毎回、俺が全額負担はさすがに痛い。うん、二人に割り勘の要請を試してみるかな。

多分、拒否されるけどね。

「ま、こうなったら覚悟を決めるしかないな」

「そうそう、それでこそ颯介よ」

空を見上げると雲一つも無い清々しい青空に穏やかな太陽が俺らを

見守っているように見えた。

幕間【Aクラス戦後の休日】（後書き）

次は清涼祭か……

上手く颯介を活躍させる事が出来るのかな？

今現在の構想では誘拐を阻止出来てねー

第九問 【清涼祭】その1（前書き）

学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力下さい。

『あなたが今欲しいものはなんですか？』

姫路瑞希の答え

『クラスメイトとの思い出』

教師のコメント

なるほど。お客さんの思い出になるような、そういった出し物も良いかもしれませんね。写真館とかも候補になり得ると覚えておきます。

長尾颯介の答え

『叩き折られたのと同じ成人ゲーム』

教師のコメント

それは求めないで下さい。叩き折られたままでいてください。

吉井明久の答え

『カロリー』

教師のコメント

この回答に君の生命の危機が感じられます。

第九問 【清涼祭】その1

桜の花が完全に姿を消し、新たな葉が芽吹いてきたこの季節。

文月学園の新学年最初の行事——『清涼祭』が近づいていた。

学園内はそれぞれの出し物のために教室を改造したり道具を手配するクラスがいる。このような光景が当たり前のように目に入る。

そんな中ちゃぶ台からミカン箱になった我ら、Fクラスは何をするかというと——

『吉井！ こいつ！』

『勝負だ、須川君！』

『お前の球なんな、場外まで飛ばしてやる』

『言ったな！？ こうなれば意地でも打たせるもんか！』

何もせずに、校庭で野球をして遊んでいた。

「あいつら学習能力がホント無いよな」

「いや、お主もゲームをやっている時点で同じなのじゃが……」

「バレなきゃいいんだよ。こういうのは」

俺はレベルが9999まで上がる史上最凶やりすぎシミュレーションRPGをやっていた。

『貴様ら、学園祭の準備をサボって何をしているか!』

鉄人が鋭い弾丸のように校舎から走っていた。ふむ、そろそろ俺も終わりにしよう。

この後はどうせ出し物を何にするかだろうな。勝手に決まるだろうし寝るとしよう。

あー、クソッ、ミカン箱じゃ寝心地が悪いぜ。

ざわざわとした耳障りな声で眠気が吹っ飛んでしまった。もうクラスの出し物は決まったのだろうか？

「……土屋の言う写真館って、かなり危険な予感がするんだけど」

写真館……だと!? 俺は顔を上げた。黒板の方見ると明久が何やら書いていた。

【候補1 写真館 『秘密の覗き部屋』】

「覗き……部屋か……中々良い名前だな」

「ぬ、復活したのう」

「寝覚めて一番に会うのが可愛い秀吉だとすると今日はいいいことがあるな」

優子とはまた違った可愛らしさだからいいよなあ。

「そんな事言うと姉上に折檻されるぞ」

「大丈夫、大丈夫。聞かれてない——」

俺の携帯が震えている。背面のディスプレイを見ると優子の名前が流れていた。

「……やべえ。見る前から寒気がするんだけど……」

「何故かワシまでも寒気がするのじゃが……」

ええい！ 寒気がなんだ！ 見てやる！

【From..木下優子

今何故かアンタを修正しないといけない感じがしたんだけど？】

「……（ガクガク、ブルブル）」

「ん？ まだ文が続いておる——」

【追伸 秀吉——殺す】

「……（ガタガタ、ブルブル）」

なんという事だ！ 秀吉が処刑されるとは！

「……すまん。秀吉の事は一生忘れない」

「そ、颯介！ 後生じゃ！ 姉上を説得してくれ！」

「見て！ 月よ！」

窓から空を見上げる。無論、空に月はまだ浮かんでいない。

「話を逸らすでない！」

「うーん、頑張ってはみるよ……」

「そ、そうか、頼んだぞ」

俺が土下座すれば秀吉の命が助かると思う。

……多分。

「——そうやってイロモノ的な格好をして稼ごうってワケじゃない。そもそも、食の起源は中国にあるという言葉があることからわかるように、こと『食べる』という文化に対しては中華ほど奥深いジャンルはない。近年、ヨーロッパ文化による中華料理の淘汰が世間では見られるが、本来食というものは——」

須川が中華料理について熱弁を奮っている。何かこだわりがあるみたいだ。

明久が黒板に須川の意見を書く。

【候補3 中華喫茶 『ヨーロッパン』】

ちなみに二番目はウェディング喫茶だった。なんだそりゃ？ どれ
も面倒だな……一番以外。

そうだ！ いい案を思い浮かんだ！

「ほい！」

「はい、長尾」

島田に発言を許された所で俺は立ち上がった。一息ついて口を開いた。

「皆、今までに出た案は一般客が満足する良い案だと思う。だけど俺はこれらの案よりも最上の案を思いついた」

『最上の案……だと？』

クラス内にどよめきが起こる。

「学園祭に来るのは自分から来たいと思っている人ばかりではない。嫌々連れられた者、振り回される者、ストレスが溜まりに溜まった者などなどそういう人もいるんだ」

『そうかもしれないけど……今までの案でも十分だと思うけどなあ』

「来たくなくて来た人も興味があって来た人も両方楽しめて、ストレスを発散できるのがあるんだ」

そうこれはかなりスカツとする物だ。

『……ゴクリ』

『ストレスを発散できるだど?』

俺は黒板前に来てチョークを持つ。

「ストレスを発散するには怒りをぶつけなければいい。相手が無様な姿になればスッキリするだろ? だから、これだ!」

言葉と共に手を動かして黒板に書く。

【候補4 パイ投げ『あなたの怒り 買います(対象……吉井明久のみ)』】

「なんで僕のみなのさ!」

『なるほどな。いいじゃないか』

『ああ、吉井なら心置きなく投げられるしな』

次々に上がる肯定的な意見。

「皆、僕を見捨てる気だな!」

『『『ああ、そうだ!!』』』

「なんて奴らだ!」

「皆、清涼祭の出し物は決まったか？」

新しくFクラス担任になった鉄人が入ってきた。

「今のところ、候補は黒板に書いてある四つです」

島田が言うと、鉄人はゆっくりと黒板に目をやった。

【候補1 写真館 『秘密の覗き部屋』】

【候補2 ウェディング喫茶 『人生の墓場』】

【候補3 中華喫茶 『ヨーロッパアン』】

【候補4 パイ投げ 『あなたの怒り 買います（対象……吉井明久のみ）』】

「……補習の時間を倍にした方が良くかもしれんな」

『せ、先生！ それは違うんです！』

『そうです！ それは吉井が勝手に書いたんです！』

『あ、最後のは長尾です！』

上等だコラ。俺を生け贄にしようとした奴、誰だ！？

「馬鹿者！ みっともない言い訳をするな！」

鉄人の一喝で、黙る一同。多分、鉄人が怒っている理由は――

「先生は、バカな吉井を選んだこと自体が頭の悪い行動だといっているんだ！」

ですよー

「まったくお前達さ……。少しは真面目にやったらどうだ。稼ぎを出してクラスの設備を向上させようとか、そういった気持ちすらないのか？」

溜息まじりの鉄人の台詞。それを聞いた途端にクラスの皆は目の色が変わった。

『そうか！ その手があったか！』

『なにも試召戦争だけが設備向上のチャンスじゃないよな！』

『いい加減この設備にも我慢の限界だ！』

一気にクラスは活気づいた。皆、設備目当てで試召戦争を起こしてたからな。

「み、皆さんっ！ 頑張りましょう！」

姫路にしては珍しくやる気を出していた。でもなあ、去年の経験からして出し物の売上金は大したこと無いからな。

売上金からして良くてちやぶ台が取り返せるかどうか位だろうしな。全体的に設備を向上させるのは望めない。

「あゝ、喉渴いた……」

「んじゃあ、ジュースでも買いに行こうぜ。サボりも兼ねてな」

雄二がそう提案してきた。クラスの方は何とかなりそうだし、提案に乗るか。

「ああ、適当なところで飲もうぜ」

「よし、決まりだな」

俺と雄二は鉄人にバレないようにこっそりと教室を抜け出した。

第十問 【清涼祭】その2（前書き）

問 イギリスの正式名称を答えなさい

長尾颯介の答え

『グレートブリテン及び北アイルランド連合王国』

教師のコメント

正解です。イギリスはイングランド、スコットランド、ウェールズ、北アイルランドからなる王国です。よく覚えておきましょう。

吉井明久の答え

『ユナйтеッド・シネマズ』

教師のコメント

それは映画館です。

第十問 【清涼祭】その2

「颯介は何飲むんだ？」

自販機の前に到着して雄二が聞いて来る。

「あー、ジンジャーエール。ほい、金」

「おう」

雄二にジンジャーエールの代金を渡して、少し待つ。

「買って来たぞ」

「サンキュ」

雄二からジンジャーエールを受け取った。買ったばかりなのでよく冷えている。

「雄二、今年の清涼祭は何処で暇潰す？」

「そうだな……いっそのこと学校を休むか？」

「お、それいいね！ 街にでも遊びに行ったりとかいいな」

缶のふたを開けて、飲みながら歩く。クーツ、この舌を刺すような刺激が美味い。

「ん？」

雄二はポケットから携帯電話を取り出した。

「馬鹿から電話だ。ちょっと待ってな」

明久から電話らしい。何かしらあったのだろうか？

「……あ、颯介」

「何か用か？ 翔子」

翔子と会ってしまった。翔子の服は制服では無く、体操服だ。身体
のラインがクッキリと現れている——特に胸の辺り。

「……うん。話がある」

ブラジャーの色は白だ。心の中で歓喜の声を上げて、翔子の話に耳
を傾ける。

「……今週末に如月ハイランドに行——」

「雄二バリア!!」

説明しよう！ 雄二バリアとは坂本雄二を生け贄に捧げる事で俺が
逃げやすくなる技だ。

ちなみにこの技は生け贄にした者の友好度が大幅に下がる恐れがあ
る。

「うおっ！ 何すんだ、颯——」

電話をしている雄二を翔子の方に押して、俺は階段をかけ上がった。

『……邪魔』

『は？ おい、その手に持ってるのって——ギャアアアアアッ
！！』

南無。また、尊い命が失われたか……雄二、今までありがとう。

「それにしても、翔子の奴如月ハイランドって言ったよな？ 絶対に言ったし」

俺は屋上に着いて、改めて考えた。

如月ハイランドは今週末に開園するテーマパークだ。多分、翔子は三人で行こうと提案するつもりだったのだろう。

新しく開園するテーマパークは確実に混むのでハッキリ言って行きたくない。

「うーむ、どうやったら諦めさせることができるか」

説得？ 無理、俺の意見は全部却下される。
押し倒して愛を囁く——も無理だな。うん、逆に俺が押し倒されそうだし。

「……颯介、見つけた」

げげっ！ 翔子だし。

「えーと……今、授業中何ですけど」

「……颯介のためだったら規則なんて関係ない」

最近、分かってきたんだけど……翔子って軽くヤンデレが入っているような気がする。

「如月ハイランドの件だったら俺の懐がヤバいので無理です」

「……じゃあ、私の家に来てほしい」

家……？ まあ、それくらいなら――

「……颯介と結婚の話を家族としたい」

「待て待て待て！！」

おかしい。おかしすぎる。なんで結婚の話になるんだ！？

「……もちろん、優子もその話をするよう言っておく」

「日本って一夫一妻制だぞ？」

「……イスラム圏の国で結婚すればいい」

「確かにそうだが……少し落ち着け」

翔子を落ち着かせるために腕を掴もうとしたが――

「……善は急げ」

「だああああっ！　はやっ！？」

俺の手をすり抜けてもの凄いスピードで走り去ってしまった。

おいおい、コレヤバくね？　十六才にて結婚の相談とか……いったい何のエロゲだよ！？

家に行くのは良いとして、結婚の話は何とかして諦めさせたい。何か良い方法はないものか？

駄目だ！　何一つ浮かばねえ。……Fクラスの誰かに相談してみようかな？　うん、それがいいな。

頼りになりそうな人は……

明久↓鈍感馬鹿

雄二↓完全なる傍観者

康太↓出血で話が進まない

秀吉↓最高！

「総合的に見た感じ秀吉だな」

そうと決まればFクラスに戻って秀吉に相談しよう、そして秀吉の可愛らしさをたっぷり堪能しよう。

「秀吉ー、いつも可愛い秀吉ー」

教室に戻った俺は秀吉を呼んだ。

「颯介よ、可愛いは止めてくれんかのう？」

「事実だしいいじゃん。なあ、秀吉が可愛いと思う奴全員挙手!!」

シュバババツ!!（Fクラスの男子が挙手する音）

うん、お前ら馬鹿だけど好きだ。

「な、Fクラス公認の可愛いさだ」

「まったく、お主らは……」

秀吉は頭を抱え、深いため息をついた。そんな姿も可愛らしい。

「と、コミュニケーションを取った所で相談があるんだが」

「む？ なんじゃ？」

「実はな、ついさつき週末に翔子の家族に結婚の相談をする事になっちゃった」

F F F 団の会員であるFクラスの男子に聞こえないように声の大き

さを下げる。

翔子と優子と付き合い始めてから彼らの動きがまた活発になってきたからだ。

まあ別にまだ攻撃は来ないからいいが、もし来たものならば一年前の惨劇を引き起こすまでだ。

「それは難儀じゃのう」

「秀吉も無関係じゃないぞ？」

「ひょっとして……ワシの家にも？」

ひょっとしても何もそうなんだよな。

俺は黙って首を縦に振った。

「相談というのはその話を阻止したいという事かろう？」

「イエス」

秀吉は俺の言いたい事が分かっている。さすが、未来の弟だ。間違えた……親友だ。

「むー、そうじゃな……」

秀吉は目を瞑り色々と模索しているようだ。

「……無理じゃな。何も思いつかないのう。ただ分かる事といえば、姉上は喜んでお主を呼ぶじゃろうな」

「もっと必死に考えてくれよ。もし、この話が親御さんに通って認可されたら結婚なんだぞ」

学園に在学中はさすがに結婚は無いだろうが、卒業したらすぐさま結婚になりそうな気がする。それは嫌だ。俺はまだまだ人生を楽しみたい。

「別に良いでは無いか？」

「はい？」

えっと、何を言ったんだ秀吉は？ 良いでは無いかって秀吉は俺の結婚に賛成ということなのか！？

「お主は霧島も姉上も好きじゃから付き合っておるのじゃろう？」

「まあ……そうだな」

「だったら、問題あるまいて」

秀吉って愛の前があれば法律なんて関係ないっていう部類なのだろうか？

「うーん、ん？ そうだ」

「何か名案が思い浮かんだのかの？」

俺は携帯電話を取り出し、翔子と優子宛のメールを打つ。
よし、送信っと。

「ほら、召喚大会あるじゃん。それに優勝出来たらいいよ的な感じで送った。この大会姫路と組めば必ず俺が優勝できる」

「姫路は島田と組むのじゃが」

場の空間が一時固まった。あ、メールが返ってきた。当然のオーケーだった。

「……………マジで？」

「うむ、ちよつと訳ありでの中」

秀吉から姫路が転校させられるかもしれないという話を聞かされる。

「はあ、そんな理由がねえ……それって二人ともFクラスじゃないと駄目なのか？」

「どうなのじゃろ？　姫路、ちよつといいかのう？」

「え？　はい、何ですか？」

姫路がこちらに駆け寄ってくる。

「召喚大会って両方共Fクラスの人じゃないと駄目なのか？」

「えっと……多分片方だけがFクラスで大丈夫だと思います。長尾君も召喚大会に……？」

「ああ、ちよつとな。優勝しないといけない理由が出来しまった」

さりげなくかつこよく呟いて見る。

「自分で招いた結果なのによく言うのう」

「はい、そこ突っ込まないでね」

「あ、あははは……」

姫路が明らかに無理に笑っているような気がする。

「で、颯介は誰と組むのじゃ？」

「久保利光だな。うん」

明久が好きで好きでたまらない男だ。

「久保が協力してくれるのかのう？」

「明久の寝顔写真で買収するから問題ない」

「お主、明久を売る気満々じゃのう」

確か、家のアルバムに写真と共にネガが挟まれて残っていたはずだ。

「な、長尾君!!」

「はいいいっ!?!」

姫路がいきなり大声を上げたので思わずすっとんきょうな声を上げてしまった。

「あ、あの！ 私にも……その……吉井君の写真をくれませんか？」

姫路は身体をモジモジさせながら聞いてきた。

「あ、ああ、別にいいけど？」

「本当ですか！？」

姫路の笑顔がとてつもなく眩しい。

「今週中に渡すよ」

「ありがとうございますっ！じゃあ、お願いしますね」

とても嬉々とした様子だった。まあともあれ、久保を買収しに行ってくるかな……

第十一問 【清涼祭】 その3

「おースゲースゲー、まともになっている」

「ホント、凄いわね」

清涼祭の初日の朝。

あの豚小屋なみだった教室が中々の中華喫茶店に姿を変えていた。

「やっぱ、思ったんだけど、テーブルはどこから奪っ——ゲフンゲフン、借りた方がよかったんじゃないか？」

「うん、颯介。言い直しても駄目だからね。はっきりと奪うって聞こえたからね」

けっ、相変わらず、こういう言葉には敏感な奴だな。

「せっかく木下君が作ってくれたんですから、良いじゃないですか」

姫路までがそう言葉を返す。まあ、そうんだけどさあ。このテーブル、ダンボールにクロスを掛けただけじゃん。

「とりあえずは体面はなんとかあったがの。捲られたら終わりじゃ」

秀吉がクロスを捲ると、いつも見慣れた汚い箱が現れる。

「これを見られたら店の評判はガタ落ちね」

「きっと大丈夫だよ。こんなところまで見ないだろうし、見たとしてもその人の胸の内にしまっておいてもらえるさ」

「や、それは希望的観測だぞ、明久」

明久の楽感的な考えに我慢出来なかった。

「仮にその場は黙っていたとしても必ずその秘密は口コミで広がり、来なくなるだろうしなあ」

「心配しすぎだよ。颯介」

オメーが楽感的すぎるだけだろ。仕方ない、一応テーブルの確保だけは裏でしておくか……。

えーと、良い具合のは応接間と休憩室にあったな。

「わぁ……。美味しそう」

「土屋、これウチらが食べちゃっていいの？」

どこからテーブルを奪って来ようかと模索していると女子の声が聞こえた。

「……………（コクリ）」

「では、遠慮なく頂こうかの」

姫路、島田、秀吉が康太の持っている皿に盛られている胡麻団子を頬張った。

「美味しいです！」

「本当！ 表面はカリカリで中はモチモチで食感も良いし！」

「甘すぎないところも良いのう」

三人の女子達からは絶賛だ。

「お茶も美味しいです。幸せ……」

「本当ね……」

姫路と島田は目をトロンとさせへブン状態になった。二人の様子を見ていると余計に食べたくなる。

「長尾君、そろそろ召喚大会が始まるよ」

「あれ？ どうして久保君が？」

「よ、吉井君……」

久保は教室に入ってくるなり、明久を見ると頬を少し赤くさせてメガネを押さえる。

「もうそんな時間か」

「え？ どういう事？」

明久の馬鹿面がいつもに増して馬鹿っぽく見えた。

「長尾君と召喚大会に出るんだ。聞いたよ。吉井君も出るんだってね。お互い、頑張ろう」

「え、はあ……こちらこそ」

久保の握手に明久が応じる。Fクラスの皆からの視線が集中しているのが感じた。

『やっぱり、久保の奴……』

『ああ……。マジだな……』

『よし！ 急遽、トシ×アキを発行して売りさばくぞ』

というような声も隅からボソボソと聞こえた。
まあ、明久が犠牲になろうが知ったこっちゃ無いが。

「じゃ、ちよっくら行ってくる」

俺はそう切り出して久保と教室から出ようとする。

「……………胡麻団子」

「ん、ああ、頂くぜ」

康太から胡麻団子を受け取って教室から出た。

「長尾君のクラスは喫茶店かい？」

「ああ、中華喫茶だ。Aクラスはどうなんだ」

胡麻団子を指でふにふにと触っていると久保が出し物について聞いてきた。

「メイド喫茶だよ。女子がホールで男子が厨房だよ」

「はあ、ありきたりなのを選んだのか。ちなみにその案の提案者はどっちなんだ？」

「女子だったかな？ 特に代表と木下さんが推していたような気がする」

な、何やら嫌な事が起こりそうな予感がするんだが。

「それでその団子だけどういつまで遊んでいるんだい？」

「スマン、目障りだったか」

「いや、そういう訳では無いけどね」

胡麻団子を口の中に放り込んで勢いよく噛む。

一口噛むと中からドロリとした物が口中に広がった。

「ふむふむ。表面はゴリゴリでありながら中はネバネバ。甘すぎず、辛すぎる味わいがとっても——んゴバっ」

意識が一瞬吹っ飛んだ。

そして、目を開けると綺麗な花畑と河が流れている。どうにかしてこの河を渡りたいのだが渡れない。

「むっ……アレは」

辺りを見回せば舟が停まっっていて船頭らしき人は河の方を見ている。

「あの、この河を渡りたいんだけど」

「この河を渡りたいんですか？　でしたら――」

声を掛けてみると女性の声であった。へえ、今時の船頭って女性もやるんだ。

「私と結婚して下さい」

そんな事を言いながら女性が振り向く。その女性は――

「ななな、玲さんんんんん！！　嫌だあアアアッ！！」

何故、お前がッ！！　あ、いや、貴女がアアアッ！？

「な……く、……なが……君、長尾君！！」

目を覚ますと久保の姿があった。え、アレ？

「びっくりしたよ……いきなり倒れて何か叫ぶんだもの」

「悪かった、少し疲れていたようだ」

これはアレだな……。ウン、康太の奴、姫路のポイズンクッキングスキルで作られた胡麻団子を渡しやがったな。

それにしても、玲さん……。どこまでも追っかけて来るんだな……。怖

えええッ。

「長尾君、急ごう。僕らの試合が始まりそうだ」

「マジか？ 分かった」

試合がもうすぐ始まるというので俺達は急いで会場へと向かった。

「えーそれでは一回戦を始めます」

校庭に作られた特設ステージにて大会は行われる。

「サクッとやって終わりたい所だけど……」

立会人は物理の木村教諭だ。勝負内容は当然、物理だ。しかも相手はBクラス。

「少し苦戦するかもしれないね」

久保と俺は文系。理系が苦手だ。

「男子の首席と次席のコンビかよ……ついてねーな」

「だけど、奴ら二人は文系だったはずだから勝ち目があるはずだ」

相手には俺らの不得意科目に関する情報が筒抜けだ。

「それでは始めて下さい」

「「「^{サモン}試獣召喚」」」

対戦相手と声が被り、召喚獣が現れる。相手の召喚獣は剣道着姿の竹刀を持ったのと柔道着姿でヌンチャクを持っている。

俺らの召喚獣の武器は大鎌と大鎌、つまりはカマカマコンビだ。いや……訂正しよう。大鎌コンビだ。カマカマだとアレな人に見える。

片方は本当にアレだけどさ。

『Bクラス 真田宏&神田彰太 VS Aクラス 久保利光&Fクラス 長尾颯介
物理 176点&163点 VS 223点&139点』

やっぱキツイなこれは……

「長尾君、頑張って持ちこたえてくれ」

「了解、了解」

久保は点数の高い方に行った。俺の相手はヌンチャクを持っている方だ。

「てあッ！」

ヌンチャクが俺の召喚獣の頭を捉えようとする。大鎌を盾にしながらバックステップで後ろに下がる。

「逃げんのかよ？」

「点数が高い相手に正面からぶつかる馬鹿がどこにいるんだよ。あ、そこに居るね。プツ」

久保の方が終わるまで時間稼いだ。

久保の方に行っても困るので挑発をして引き寄せておく。

「デメエ、ぶっ飛ばしやる！」

「神田って言ったけ？ ドラクエでそんな名前の敵キャラいたよな。あ！ アレはカンダタだったな」

どうやら、熱くなりやすい相手のようなので火に油を注ぐもとい、ガソリンを注ぐ勢いで馬鹿にしてあげる。

「てりやあああッ！！」

完全に怒りモードで技が単調になっている。ヌンチャクがただ横一閃に振られているだけだ。

それをしゃがんで避けつつ大鎌でちょこっと相手を斬って下がる。

「ウラウラウラウラウラウラ！」

相手はヌンチャクをデタラメに振るいながらこっちに向かってくる。

「オイ、神田、落ち着け」

真田という奴が落ち着かせようとはするが止まらない。

よくよく見ると神田の点数が少しずつ減ってきている。

なるほど、自分のヌンチャクでダメージを受けているのか。馬鹿だ

ね。

「長尾君、やったよ」

「ほい、きた」

さすがは久保、数分足らずで真田を撃破してくれた。後はこの神田だけだ。だけなのだが……。

「UR
A
U
R
A
R
A
R
A
A
A
A
A
A
! !」

何かね、掛け声が人の声じゃなくなっている。よく見れば召喚獣の目が狂気の色に染まっている。

「こりゃあ化物だな。化物退治の定番は……」

点数が元の半分になった神田に、足を向けて駆ける。そして、大鎌を迅速に横に振るった。

「首狩りッ！！
つとね」

「それまで、勝者、久保・長尾ペア……」

首を一閃し、勝負に勝ったのだが、木村教諭の声はかなりトーンダウンしていた。

やはり、召喚獣とはいえ、首はまづかったのだろう。
まあ、確かにアレはホラーだな。胴体から離れた首が数秒間残ったからな。

「まずは一勝だ。久保」

「うん、そうだね」

グーの形にした拳でゴツンとお互い軽く合わせた。

「ああ、そうだ。長尾君、僕のクラスの出し物に来てくれないか？」

「遠慮しとくよ。なんか嫌な事しか起こらない感じがするから」

絶対、あの二人は何か企んでいるだろうからな。

ああ、怖い、怖い。

「それでいいのかい？ 代表と木下さんから呼んでくるよう言われたんだけど」

「……………ウン、イイノ。じゃ、二回戦デ」

二人が怒り狂う事を想定しながらも、俺は逃げるようにその場を駆け出した。

第十一問 【清涼祭】 その3（後書き）

一ヶ月近くの放置を経て復活！と、言ってみる。

一ヶ月も放置した理由というのはですね……

なんか、自分の作品がテンプレっぽいなあと思って書く気が失せて放置したんですね、ハイ……エゴです。

そんな状態な自分に感想が来て、待っている人もいるんだな、と気づき復活しました。

アレですね。二次創作でも小説という子を生みだしたからには最後まで面倒みないといけないんです。

というわけで、これから先も書いて行きます。

第十二問 【清涼祭】 その4

「誰もいないようだな」

休憩室になっている教室を見回す。

俺の狙いはただ一つ、教室のど真ん中に置いてある丸型のテーブルだ。

このテーブルなら一人で運べるくらいの重さだ。

「よっ……と」

テーブルを持って運びだそうとすると、携帯電話が震えた。

全く、誰だよ？ 今から一仕事するのに。くだらない用件だったら、ただじゃおかね――

「げ……」

電話の発信者は優子だった。誘いを無視したから、電話を掛けてくるだろうとは予想していたが……。

早すぎる。久保と別れてから五分しか経ってねーぞ？

「もしもし……」

グチグチしていても仕方ないので電話に出る。

『アンタ、何で来ないのよー!!』

「どわっ!?!」

通話口から優子の高音量の怒声が耳を突き抜けた。
くう、耳がキーンとする……。

『ちょっと、聞いている!?!』

「聞いている、聞いている。声を下げろ。うるさい」

もう、耳が痛い。怒るにしても、もう少し声を下げて欲しい。

『うるさいって何よ! アンタが来ないからでしょ』

「悪かった。だが、俺は今仕事中だ。手が離せない」

『……関係ない。今すぐ来て欲しい』

話し手が翔子に替わったようだ。

「や、だからな、翔子。俺、クラスの仕事があるの。仕事が終わったら行くよ」

『……いつ、終わる?』

「ん……? もしもし? な——か、電——が——悪——聞こえ——いい」

途切れ途切れに喋る。無茶な出来事に巻き込まれぬように全力で、逃げに回る。

「嘘つくな！ アタシの携帯、電波三本立って——」

喰いかかってくる優子の声を遮るように通話を終了した。

それだけでは、再び掛けてくる可能性があるので優子からの電話を着信拒否に設定する。

「後はテーブルを運んで、優子と翔子に捕まらないように注意しながら大会に優勝する。——うん、ハードモードだ。誰もクリア出来ねえ」

だが、仕方ない。捕まったら、俺の精神が著しく悲惨な状態になってしまう。

そのような惨劇を回避するためにも全力を尽くす。信じれば、奇跡は起こせる！

俺は再び、テーブルを持ってFクラスを目指す。

「ん？ 長尾、テーブルを持ってどうした？」

「あ、ど、どうも西村先生。コレ、Aクラスに持って来てって頼まれて、運んでいるんです」

見回りの鉄人が目の前に現れた！

俺は特技『誤魔化す』を使用した。

「ほう、珍しいな。お前が使い走りにされるとはな」

「ええ、Aクラスに彼女がいるんですけど、ワガママな奴でして」

「今から尻に敷かれるようじゃ、将来が大変だな。ハッハッハ」

『誤魔化す』は鉄人に見事に的中した！

「言われずとも分かってますよ」

「まあ、頑張ると良い」

そう鉄人と朗らかに言葉を交わして、すれ違う。

俺は不審に思われぬよう、全力かつ慎重に足を動かす。

「ん……？ 休憩室にあったはずのテーブルが無いぞ」

ちっ、バレたか！

俺はすぐさま、駆け出した。

「長尾！ お前のそのテーブル、休憩室のだろう！！」

鉄人が後ろからものすごい勢いで迫ってくる。

なんていう速さだ。しかし、捕まってるものか！

「知らねえよッ アンタの目がおかしいんじゃないか！！」

「だったら、確認させろ」

「清涼祭が終わったら、いくらでも確認させてやる。だから、それまで、腹を壊して休みやがれッ、鉄人」

「教師に向かってなんて言いぐさだ！」

くうっ！ しつこい……。全然まけねえ。

校舎内を上から下へと駆けめぐる。

「クソッ！ あいつら、やってくれやがって」

「まあ、そう怒るな。夏川。別の手がある」

俺の前方にハゲとニワトリがなにやら会話していた。
見たかんじ、上級生っぽい印象がある。

「どんな手だ？ 常村」

「別の喫茶店で――」

上級生だろうと構いやしねえ。こちらは鉄人から逃げてんだ。
なのに、のんびり談笑なんてしてんじゃねえよ。

「邪魔だ、ハゲとニワトリッ！」

「ぶべらッ!？」

「グエッ!？」

廊下の真ん中にいた、ハゲニワを思い切り、テーブルを使って蹴散らした。

ハゲはテーブルの足が脇腹に、ニワトリの方はケツに当たった。

「ぬう、大丈夫か？ 二人共。長尾！ 後でじっくり聞かせてもら
うぞ！」

「その要求は却下だ。鉄人」

そうセリフを吐いて、廊下を駆け抜けた。

鉄人は巻き込まれたハゲニワを気にかけて、追いかけて来なくなつた。

という事は……だ。

俺の……勝利だ！　これで鉄人との勝敗が六十六勝五十二敗となつたわけだ。

今日はなんだか良い事が起きそうだ。

「ただいまっ」と

意気揚々としながら、Fクラスに到着した。
教室を見るとテーブルがいくつか変わっていた。

「おお、颯介帰って来たか。試合はどうじゃった？」

「勝って来たぞ。その帰りがけにコレ、強奪してきた」

迎えてくれた秀吉にテーブルを見せつけた。

「ぬ、まったく、お主らは考えがよく似ておるのう」

なんだ、あの二人も動いているのか。

「まあ、ともかく大助かりじゃ」

「秀吉も強奪した物なのに、当然のように受け入れている時点で同じよね」

ホールでウェイターをやっていた島田がそう指摘する。

「島田か、少し言い換えよう。コレは強奪したんじゃない。コレは――清涼祭が終わるまで借りただけだ」

「結局、それは強奪したのと変わらないじゃない。ま、いいわ。早く入れ替えましょ」

「了解」

教室のダンボールのテーブルと入れ替える。先ほどと違って怪しさが幾分が減った。

テーブルは二人が調達しているらしいので、俺が動かなくても大丈夫だろう。

「すみません」

客の中から声が上がる。

秀吉は会計、島田と姫路は別の客の注文をとっていた。

「ホールの手伝いでもするか」

自分だけテーブルを強奪しただけというのは居心地が悪いので、手伝う事にした。

「はいはい。ご注文をどうぞ」

声を上げたところに行って女性客二人の前に立つ。

メイド服を着ていた所を見ると、おそらく他のクラスの子達なのだろう。

「注文なんですけど——」

ん？ この声は確か——。

「——長尾颯介を一名」

一言一句違わす揃った声を発したのは翔子と優子の二人だった。
なんてついていないんだ。行動に出るのが早すぎる。

「お客様、そのような者はメニューには乗っていません」

「……私の目にはそう写っている」

「それは幻覚です。すぐさま精神科に行く事をオススメ致します」
あまりの驚愕に口調がおかしな事になっている。

「いいのよ。この注文で……。さあ」

「……行こう」

ガッシリと二人に両腕を握られる。
もう、俺には未来は無いのか？

「も、もうすぐ大会の第二回戦だから——」

「黙りなさい」

「……ハイ」

悪あがきも虚しく一蹴されて、二人に引きずられていく。

その際に男子は血の涙を流して俺を呪い、秀吉や康太は胸で十字を切っていた。

「あーる晴れた昼さがり……」

俺はドナドナを歌いながらAクラスへとお持ち帰りされた。

第十三問 【清涼祭】 その5

メイド喫茶——それは日本が誇る、アキバ文化。

おそらくは、人生に一度は体験するであろうものだ。そこで永遠の十七歳を鑑賞したり、『ウフフ、キャハハ』してもいいだろう。

だけどな……値段が高い。

一度、行った事あるけど……お前らどこのぼったくりバーだよ！
って叫びたくなるからね。うん。まだ行ったこと無い人は勇気を出して行って見ればいいんじゃないかな？

俺はあまり好まないけど。だってさ、日本のってスカート丈が短くない？

俺、正統派の長い方が好きなんだよね。あの厳かな感じが好きなんだ。でもね、Aクラスのメイド喫茶を見て認識が変わったね。

優子と翔子のメイド姿を見たらさ、めっさ可愛かった。なんていうの……黒のニーソックスとストッキングにやられた。

もうここに何時間もいてもいいかな？　と思うようになった訳よ。
だからね——

「この縄をほどいてくれええええっ！！」

只今、イスに絶賛拘束され中です。

「駄目。アンタ、すぐ逃げ出すじゃない」

「と言いましてですね。これは少しばかりやり過ぎじゃありません？」

キツく縛られた手足を動かす。

「大会の出番には解放しているんだから、ありがたく思いなさいよ」

「出番が終わったらずぐ拘束って止めてくれない？」

先ほど二回戦時には解放されて、試合に勝利するとすぐに拘束された。

もう勘弁して欲しい。

「……颯介、好き」

「翔子……俺をイスにして座るのはやめろ」

特にコレがきつい。周囲からの視線がビシバシ突き刺さって痛い。それに俺のセンサー的な所に堂々と座っていて精神が削られていく。ホントはセンサーは反応するんだけど、今はスイッチを無理やり切っているみたいな感じだ。

「……どうして？」

「こっち向くな！」

翔子は俺の制止を聞かずにこちらを向いて座り直す。グガアアアアアア！ 抑制抑制！ 煩惱退散！
けれど、翔子のふくよかな胸が当たって振り払えない。

「……あ、でかく」

「マジ、止めて！ もうライフゼロよ！ 手足は縛ったまんまでい

いから、イスのはほどいて下さい!」

必死に懇願してようやく、イスの縄だけは、ほどいて貰った。
俺は燃え尽きたようにして机に突っ伏した。

「もう、つかれた」

ここまで疲れるのは久しぶりだ。

「まったく……」

「オイ、なんだその『まったく』はおかしいだろ。俺の方がまったくだよ」

優子にツツコミを入れるものも声に張りが出ていなかった。
というのはだ、二人にかなり振り回されておりストレスが溜まっている証拠なのだろう。

「というか、接客をしなくてもいいのか？」

「してるわよ。ちゃんとしっかりと」

「優子はな。翔子は全然だろ？」

「……そんな事無い。ちゃんとやっている——颯介だけ」

こいつ、言いきった!?

ホントにさ……難儀な性格をしているよな。これで素だから困惑するんだよな。

嬉しいような嬉しくないような気持ちだ。

「接客は平等にやれよ。で、注文なんだが『ふわふわシフォンケーキ』を一つ」

「……ご注文を繰り返します。『ふわふわシフォンケーキ』を一つと『メイドとのキス』を二つでよろしいですね」

ホントに頭が痛くなるね。この子……。

「ケーキだけだからな。後は注文していない」

「申し訳ございません。ご主人様、『ふわふわシフォンケーキ』を一つ、『メイドのお持ち帰り』を二人ですね」

「お前もかっ!!」

優子も悪ノリして、翔子と厨房の方に行った。

いつもはクールでツンツンなのにな。

今日は祭でハメを少し外しているようだ。

「あゝ、ゆっくりと休める日が欲しいな……」

今年は去年みたいにだらだらできなそう予感がするんだよな。
これまで以上に。

『二―Fの喫茶店は酷いぜ!』

『ああ、腐った箱がテーブルだったしな!』

中央から張り上げた声が響いてくる。あ、さっき俺がぶっ飛ばした

奴らだ。

しかも、俺らのクラスの悪評をばらまいていやがる。少し、カチンときたね。

テーブルの上に置いてあるフォークやらスプーンが入っている入れ物から、フォークを二本取り出す。

縛られている手で器用にジャグリングをして、二人に目掛けて投げつけたみ

『しかも——ぐわっ!?!』

『ぎゃああ!?!』

見事に頭に突き刺さり、素晴らしい悲鳴が上がった。二人はこちらに目をつけて、迫ってきた。

「てめえッ! 何すんだ!」

「すいませ〜ん。ジャグリングの練習してたら手が盛大に二人の方に向けて、滑っちゃいまして。マジすいません、ハゲとニワトリ」

「謝ってねえよな!?! それ、完全に馬鹿にしてるよな!?!」

ハゲがテーブルを強く叩いた。もっと怒れ。

「まさか! むしろ尊敬しますよ。影でキャンキャンと吠えるしかない人として」

「てめえ、どこのクラスだ!」

どこということは、俺の顔を知らない上級生という事か。素直に名

前を明かすとマズイから……。

「二年E組、黒の十三番の事、鈴木一郎だ」

「あからかさまに偽名っぽいんだが？」

「ちなみに部活は野球部、ポジションはレフトだ。趣味はMプレイです」

「手足を縛るとか変態だ！」

全部嘘です。鈴木一郎だなんて人、いねえよ。本当の趣味はPCゲームをやることだ。

「おい、変態の鈴木とやら、上級生に楯突いていいと思ってんのか？」

「あはっ、年功序列ですか？　つまらない人間だな」

「あぁっ！？　シバくぞ」

ハゲが襟を掴みあげて、俺の首を締め上げる。ズームアップされたハゲ頭を見て、笑いを噴きそうになるのを必死に堪える。

「なんとか、言ったらどうなんだ？　おい」

「痛い、痛い、痛いよ、皆さーん。見てます？　これで最上級生なんですよ、奥さん。こんな素行の悪い人が大学を受験するとかおかしいですよ？　そう思いませんか？」

「なっ!?!」

今の状況からすれば俺が被害者に見える。上級生は大学受験が控えているから、経歴にキズがつくのは嫌な筈だ。ハゲが動揺して、掴んでいた襟を手離した。

「ギャアアアア! 足を思いっきり踏まれたアアアッ!」

自分の出せるだけの演技を持って、あたかも痛い目にあった人のふりをするため、足を押さえながら床を転げ回る。

「やってねえよ!! 全部嘘だろ!」

「夏川、止せ」

「クッ、覚えてろよ!」

そんな言葉を残して、Aクラスから出ていった。撃退成功ってところだな。

「ふーっ、なんだかおかしいな。あいつらなんで妨害してくんだろ」

何か裏があるのだろうかという考えが沸き上がってくる。何だろうな、すごい胸騒ぎがするな。

「……『ふわふわシフォンケーキ』をお持ち致しました、ご主人様」

「ま、大抵、空回るんだけどな」

「……何の話?」

翔子はケーキを盆に乗せたまま、問いかけてくる。Aクラスのは普通に店に売られていても、違和感がないほどの出来栄えのケーキだった。

「何でも無い。さ、ケーキ、ケーキ」

「……うん、はい」

俺は席に着き、フォークを持ってケーキを催促すると、翔子も座った。あり？ 何故に座る？

更に、翔子は俺の手からフォークを奪い取る。え、まさか……。

「……あゝん」

やはりか！ やらと思ったよチクショウ！

「あのな、さすがに、ここじゃあ——」

「……夫婦の愛に場所はない」

「結婚してないからな。勝手に結婚した事にするな」

「……なら婚姻届、出しにいこう」

どこからもなく、二枚の婚姻届が出てきた。婚姻届にはそれぞれ優子と翔子の名前が書かれている。

「男は十八歳にならないと結婚できないからな。つーか、日本は多妻制じゃねえ。これ、前も言ったし、ネタ被ってんじゃん」

「……じゃ、子作りしよう？」

「……………」

誰かこの子に常識を授けてやって下さい。このままだと俺、胃潰瘍になりそうです。

第十四回 【清涼祭】 その6

『お帰りなさいませ。ご主人様、お嬢様』

『すごい、メイドがいっぱいじゃないか!?!』

『明久、遊びに来たんじゃねーぞ』

『やだなあ。わかってるよ』

あ、馬鹿と雄二の声だ。声のする方へと顔を向けて見ると、二人の他に島田と姫路がいて……知らない少女が一人いた。誰だ? あのツインテールの子。

「おい、ば——明久」

「今、馬鹿って言いそうになったよね!?! とうか、颯介なんで仕事もしないで遊んでいるのさ!」

「本音は?」

「メイドを近くでずっと見ているなんて、ずるいぞ! 僕も見ただった!」

明久がそう言った途端に、女性陣の雰囲気が変わった。

「本音が駄々もれよ、アキ」

「明久君は見ちゃダメですっ！」

姫路の指が明久の目に迷いもなく必中する。うわっ、痛そ。

「ギャアアアア！！」

「バカなお兄ちゃんのへんたいっ！」

目を抑える明久の腿を少女がつねる。いや、マジで君誰よ？

「颯介か……って、お前なんだそれは？ S Mプレイでもやっていたのか？」

「まったく、縄で縛られているからってS Mプレイを想像するなんて、頭が終わっているな」

「冗談だ。縛られて理由は何となく分かる。コレだろ？」

雄二は小指をピョコピョコと動かした。何というか、概ね間違っちゃいないが、そういう表現は止めて欲しい。

「ああ、そうだ、雄二。お前、翔子と幼なじみだよな？」

「それがどうかしたか？」

「アイツに常識を教えて——」

「無理だ。諦めろ」

コンマ一秒の速さでキッパリと諭された。おいおい、俺達、友達だ

ろ？ 友達なら相談について一緒に考えてくれよ。真顔で答えられると何も言えないじゃないか。

「……………そうですか。で、君、誰よ」

しばらく黙った後、俺は少女に問いかけた。

「葉月ですっ！ バカなお兄ちゃんとは結婚の約束までしましたっ！」

「ああ、そうなんだ。へえ、なるほどな」

はあはあ、明久と婚約したのか、夢見る少女だなあ。

「それに、ファーストキスまであげました」

「ファーストキスまでとはな。そうか……………明久」

「な、なにさ。改まって」

明久の肩に軽く手を置き、一拍、間を開ける。

「今日から、お前の事をキング・オブ・ロリコンと呼ぶ事にするよ」

「違うってばっ！ 誤解だよ！」

「黙れ！ キング・オブ・ロリコン！ ただ眺めるだけのロリコンだったらいいがな、手を出すのはロリコンを超えている」

少女を父親のように見守り、慈しむように眺めるのは良しとしよう。

だが、手を出したら、ロリコンじゃない。ロリコンな犯罪者だ。

「そ、それだったら、颯介が小学生の頃にキスした姉さんはキング・オブ・シヨタコンとでも言うのか！」

「おまつ、俺の嫌な思い出を掘り返すんじゃねーよ」

「まだまだ、あるよ！ 寝床や風呂場に侵入したりとか、過剰なスキンシップとか」

明久の口から俺の嫌な思い出が次々と流れる。

「言うなー！ 忘れさせてくれッ！」

「へえ……キス？」

「……他の女性と関係を持っていたなんて、許さない」

耳を手で塞いでいるところに、翔子と優子が肩に手をおいてきた。
あ、あはは……。怒っていらっしやる。

「いや、そのな……二人共、これには深い訳があっただな」

「姉さんがあんな風になったの原因は颯介が甘えていたからだよね
！」

「オメーは昔の事をほじくり返すんじゃねえよ！！」

肩におかれた手に力が入る。や、やばい、骨が軋む音がしてきた。

「裏で少し話をしよっか？」

「ねえ、ホントに弁解の余地くらい頂戴！　きっと分かってもらえる筈だから。ね？」

弁解タイムを獲得すべく、必死に懇願する。きっと、分かる筈だ。

「……ダメ、あげない。身体に刻みつけかないと」

「そこを何とか」

「……ダメ」

駄目だ。目が座っている。ゲームで見た、ヤミ化したヒロインみただ。

「雄二っ！」

「お前の事は忘れないぜ」

「オイイイイツ！　見捨てないで！　お願いだから」

雄二は親指をつき立て、今まで見たこともないような笑顔を見せてくれた。

なんて、薄い友情なんだ！？　こんなにも冷たい態度を取るなんて。

「えと……長尾君、浮気するからそういう目に合うんです。今日はじつくりと怒られた方がいいと思います」

「同感、女の子を悲しませるのはよくないわよ」

「違うっての!」

くそう、女性陣までもが、そんなことを言うだなんて……。

「ま、いい気味だね」

「オマエ、後デ、殺ス、絶対」

「ヒイツ!!」

明久に向けて、有らん限りの殺氣を向ける。後で、部屋を荒らしてやる。

「なんだか分からないけど……ヒモのお兄ちゃん、頑張ってください
い」

「ヒモって……分かって言っているのか知らんが……無垢な君の事
だ、その応援ありがたく、受け取っておこう」

小さい子から応援されると、これから始まる話し合いと言う名の私
刑に耐えられそうに思える。

「さ……言い残したい事はもう無いかしら?」

「あーあるある。最期の一言。青少年健全育成法案に断固反対!」

「そ、三次元さんじゅんより二次元にじゅんの方がいいって訳……?」

優子の怒りのボルテージがぐーんと上がった。そして、俺の身体を

引きずって行く。この一生に悔いは無いぜ。

「……こっち？ あっち？」

あ、翔子、お前は一生分からなくてもいいと思う。それよりも、優子の方が関係あるんじゃないか？

「優子、あの法案の中に……」

「知ってわよ！ 非実在青少年規制法でしょ？ 本当にふざけてるわ、○○都」

いいんかね？ ○○都って出しちゃって……。都道府県の中で都は○○都だけだよ？ アキバのある○○都だけだぞ。いや、さっきから自分も○○都、○○都って何回、連呼しているんだろぅね？ では最期にもう一つ、東○都ふざけんな、○京都。

「さてと……なんで他の女性と関係を持っているのかな」

「だ、だからな、それは誤解だ。関係ないとは言えないが、過剰なスキンシップを向こうがしてくるんだよ」

店の裏——つまりは厨房にて優子に問い詰めに対応している。怖い、この子。表面じゃ笑っているのに、冷やりとする視線を向けてくる。

「……本当に？」

「ああ、マジだ」

翔子は包丁を取り出して俺の方に突こうと近づいてくる――って!?

「おい！ 止めろって！」

「……ん」

それは洒落にならない。まさか、本当に私刑になるなんて。翔子は包丁を上には振り上げ、物凄い速さで降り下ろしてくる。

死ぬ！ と、思い激しい痛みがくるであろうと思い、目を瞑る。
ここで人生終了か……。恨むぜ神様。と、いうことにはならず、翔子は俺の手足を縛っていた縄を切っただけだった。

「えーと、分かってもらえたのかな？」

「……まだ、許してない」

「へ？」

二人に両手首を握られる。むう、二人の手は柔らかいな……。

「今までの女性関係を洗いざらいに吐きなさい」

「……他の子に振り向いちゃダメ」

そのまま手首を同時に捻られる。

「ちよっ、そっちには曲がらな……」

「話さないと……もう一回転しちゃうぞ♪」

「カワイイ！ でも、手首が痛いイイイツ！」

ゴキゴキと嫌な音が鳴り響く。これは完全に逝っちゃっているよな？

「え、えーと、今までに誰かと付き合ったりはしていません！」

「……嘘だ」

「本当だよ！？ な、翔子、この手を離してくれッ！ いい子だから、ね。ナデナデしてあげるから」

翔子さえ陥落させれば、この地獄は直ぐ様終了するはず。

「……キス、してほしい」

「……………」

キスしてあげてもいいけど、なんか外堀が一つ埋まりそうな気がするんだけど。

「何故、黙るのよ！」

「アガアアアアアッ！」

これ、完全に折れたから！？ 手首がねじ切れた感じがするもん！？
その痛みに耐えながらも私刑はまだまだ続いていく。

第十四問 【清涼祭】 その6（後書き）

テストが終わりました。両方の意味で……。
後、半年で卒業なのに、赤点の可能性が出てくるってどういう事よ？

第十五問 【清涼祭】 その7

私刑を受けて数分後……なんとか生還する事ができた。

「人間の神秘って素晴らし……」

「よ、ご苦労さん」

雄二と女性陣は『ふわふわシフォンケーキ』を食べてくつろいでいた。

ただ……明久は水と塩だけだ。またお前はそれかよ。

「明久、これやるよ」

「だ、大福だ！ いいの？！」

明久の前に皿に乗った大福を置くと、目を輝かせた。

「俺の奢りだ。食うといい」

「じゃあ、早速いただくよ」

明久はペロリと舌鼓をしながら、大福を手を持つ。
さっさと食え！ ボケ！

「颯介、やけに笑みが黒いぞ？」

「黙れ、ゴリラ」

「何？」

「っと悪い、怒りで口が滑った。黙って見てればすぐに分かるさ」

失言した事を謝罪し、お互いに明久の方に見やった。

そして、ついに大福は明久の口にへと運ばれた。

口が開き、大福をゆっくりと噛み切られていく。

一秒一秒が焦れつつく感じられた。

完全に噛み切った瞬間、自然と口元が緩む。

「あああああああー！ 辛ッ！ ものすごく辛いイイイッ！」

「よ、吉井君！？」

「何なの！？」

「わあー、バカなお兄ちゃんの顔が真っ赤です」

明久は顔を真っ赤にさせながらベロを出し、叫び続ける。

ふん、いらぬ事をべらべら喋るからそういう目に遭うのだよ。

「なるほど……仕込んだわけか」

「餡の中にハバネロを刻んだやつと練りワサビに練りカラシを混ぜ
といた」

「それは辛いな……」

ここ喫茶店なんだけど、何故か翔子が今日持ってきていた。

なんでも材料として持ってきたんだと。三つとも喫茶店のメニューの中に、使用する料理が見当たらないんだがな……。

ま、細かい事は考えないでおこう。

「水、水ううー！」

「明久、苺牛乳」

やけに赤の色が目立つ苺牛乳のを手渡すと、明久はそれを引ったくった。

そして、一気に飲み干すと――。

「喉が焼けるようにヒリヒリするうううっ！」

今度は喉を掻きむしりながら転げ回る。

愉快だ。人の不幸はとてつもなく面白い。

「苺牛乳には何を入れたんだ？」

「タバスコ一本だな。雄二も飲むか？」

「お前が飲んだらな」

「そうかい」

そう言葉を交わし、未だに悶え苦しむ明久を鑑賞した。

「あー、酷い目にあった……」

姫路が明久のために牛乳を注文し、飲ませたところで鑑賞タイムは

終了した。

うーん、もう少し見たかったんだがな……。

「まあ、いいか。後でやれば」

「まだやる気なの！？　これでチャラしてよ！」

チャラしろとか何様なんだろう？

明久のクセに生意気だ。

「後ろ向きに考えておこう」

「よし」

明久は満足した様子で頷いた。

馬鹿だ。やっぱり馬鹿だ。

「アキ、騙されているって気がつきなさい」

「なんだと！　騙したね！」

島田め、余計な事を吹き込みおって……。

明久とのやり取りすると時間がもったいないから流しますか。

「何で皆Aクラスに来たんだ」

「うん？　チビッ子がAクラスで悪評を聞いたと言ったからな、その悪評流している奴を駆除に来たんだ」

「また、無視なの！？　僕の話聞いてよ！」

五月蠅いな……まったく。

「明久……練りワサビを鼻から注入されたいか？」

「……黙っています」

よし、黙った。

「悪評ねえ？ ああ、さっき居たな。中央のテーブルに」

「ほう……」

先ほど追い出した奴らのテーブルを指した。

ハゲとニワトリだったな。ハゲの頭を思い出すとやはり笑える。

「ハゲとニワトリだったぞ」

「さっき、Fクラスに來た先輩なのかな？」

「多分な……颯介、そいつらは坊主とトサカか？」

「ああ、そうだな」

フォークでペン回しをしながら雄二の問いに答える。

そーいや、そろそろ三回戦目だな……。

早めに準備しよう。

「さてと、俺は大会に行ってくる」

「そうか、午後はちゃんとクラスの仕事をやれよ？」

仕事か……確かに何もやっていないからなあ。

Fクラスに帰ったらF F F団が襲ってくる気もするな。装備を整えておこう。

「了解、そのかわりだ。二人を丸め込めといってくれよ？ でないとまた拘束されるから」

「安心して行ってこい」

雄二に任せておけば、とりあえずは大丈夫だろう。
Aクラスを後にして試合会場へと向かった。

他の人の試合を見て時間を潰し、久保と合流して対戦相手を待った。

「これを勝てば……次は代表との勝負か……」

「次の勝負の科目は現代社会でこの勝負が古典だってよ」

トーナメント表を見ながらそう呟く。逆の方がいいのになあ……。科目が逆だったら翔子達と勝負するのが少し楽になるんだけどね。古典の点は600点越えて、現代社会は400点ちょいくらいなんだ。

翔子は500点近いだろうし、優子は400点は越えている。

三回戦の相手はBクラスだが、勝っても翔子達との勝負は苦戦が予想できるから、あんまり乗り気ではない。

つーか、あの二人、Aクラスの三年を二回戦で撃破して来たんだぜ？

どれだけ点数が高いんだよ……。

「あー最悪だ。あの翔子の点数、チートすぎるだろ」

「君の一部の点数もチートだと思うけれど？」

「一部に点が取れていても総合点じゃあ負けている」

一年の学年末の順位で上位十位に入っている知り合いは――

翔子が当然の一位で二位が姫路で三位が久保。俺が四位。優子が八位。

女子の首位次席が翔子と姫路で男子が久保と俺。

男子の首位は久保と俺でコロコロ変わる。

「それにしても来ねーな」

「うん、もう時間のはずなのにね」

対戦相手が中々やって来ない。試合開始時間からもう五分過ぎている。

観客も中々来ない対戦相手に苛立ってきている。

先生達も何か集まって相談している。対戦相手に問題が起こったのかもしれない。

「えー、この試合ですが……神谷君と飯島君が食中毒で病院に搬送されたそうですので、長尾君と久保君ペアの不戦勝と致します」

Fクラスの元担任の福田教諭が抑揚の無い声で不戦勝を告げた。食中毒ねえ……怖いな。食べる前にはちゃんと手を洗おう。

「次は二時間後だな」

「そうだね。二時間後にまた落ち合おう」

そのまま別れて、Fクラスに向かう途中である事に気がついた。
食中毒の原因って……姫路の殺人料理だったりな。

……………決して姫路の殺人料理が食中毒の原因ではありませんように。

第十六問 【清涼祭】 その8

数時間ぶりにFクラスに帰ってきた。

さあて、今まで仕事しなかった分クラス貢献しないとな。

「よっ、ただいま戻ったぞ」

「長尾が帰ってきたぞ〜!」

Fクラスに入るとクラスメイトが厨房やホールに聞こえるように知らせる。

うん? 歓迎されてんのか?

不可解に思いながら、笑顔で応えるとクラスメイトがぞろぞろと出てくる。

——包丁やアイスピックやらカッターを持って……。

「……ハハハ、皆、荒々しい出迎えだな。出来ればその凶器を下ろして欲しい」

「拒否する。もう、お前の異性交友は羨ましすぎて、憎しみでいっぱいになる。僕らにとって悪影響だ。よってFFF団の総意によって駆逐させて貰う」

須川が代表として拒否を示した。あゝ、真面目に代弁したのはいいんだけど……。

それ、お前らの本音が駄々漏れだ! まったく……もう少し、時と

場所を考えて欲しいよな。
去年なんて授業中に襲いかかって来たからな。めんどくさいと言っ
たらありやしない。

しかし、清涼祭中に異端諮問会を開かれると非常に困る。

何故か分からんが風潮被害を受けているのに、コイツらに動かれる
と更にFクラスの評判が悪くなって、売り上げが出なくなる。
どうにかして回避せねば。

「今、騒ぎを起こせばどうなるか、よく考えろ。心のオアシスであ
る姫路がいなくなるかもしれんぞ？」

「むっ……それは……痛いな」

「そしたら秀吉と絶壁のしみ——ぶげらッ!？」

何なんだ？ いきなり広辞苑が飛んで来たぞ。誰かの手でも滑った
のだろうか。

しかし……物凄い高速で回転しながら飛んで来たぞ。

「うーん、清水か……確かに何もな——ポルナレッツ!？」

次は須川のこめかみに英和辞典が直撃した。まただと？ 一体誰が
？ どんな目的で？

クラスメイトの間にざわめきが起こり始める。そりゃそうだろう。
俺も今、恐怖を感じている。

「なあ……ちよつと耳貸せ」

「なんだよ」

「あのな……ゴニョゴニョ」

近くの男子の耳の近くであることを言うよう吹き込む。

もしかしたら、と思って自分の推理結果を証明するために男子の命を使って検証する。

「えーと……貧乳しま——アルバトロツ!？」

男子は細長い百科事典によって撃沈した。

やはり、これは島田の体型について触れると殺られるみたいだな。

「よし、皆に伝えろ。ゴニョゴニョ」

「なんと! ゴニョゴニョ」

まだ生きている男子に伝言を回す。犯人は島田。胸について話を触れると抹殺される。

しかし、恐るべし島田。どこから聞いてどこから狙っているのか不明だ。

「ぺったんぺったん——ボルボロツ!？」

「浅井が殺られました!」

「馬鹿かお前ら! 決して島田がぺったんことか——」

理解度が低いFクラスのクラスメイトを叱責すると、思わず口走ってしまった。

だぁー! 俺の馬鹿野郎ー!

空気中を切るような音が近づいてくる。辞典じゃないぞ……この音。

「ちッ！ 須川ガード！！」

「止めろ、離せー、むぐッ！」

音のする方へ須川を盾にすると、彼は何かを飲み込んだ。その何かの一部が床に転がっていた。

あれ？ 胡麻団子じゃん。危険なものが飛んでくると思ったのに、胡麻団子がくるとはなんか拍子抜けした。

「……………んゴバッ」

だらりと須川の腕が降りた。クラスメイトの視線が集まる。

「須川く、お、おゝい。ダメだ、完全に気を失っている」

ひ、ひ、姫路の料理を投げてきやがったな！ あのツンデレ貧乳！くっ！ なんて卑怯なマネをしてくるんだ。とりあえず、気持ちを切り替えて……。

「須川を放置して仕事すんぞー。ほら、ホール班。注文取りに行け」

「あ、ああ、わかった」

遊びを終わりにしてクラスメイトに仕事するように促す。まあ、いい感じに今、俺への憎悪が忘れ去られているので動かしやすい。いやゝ、スペックが小さい奴らは楽でいいな。

「須川が抜けた事で厨房班が足りないんですけど……」

「んじゃあ、俺が入る。ふむ……秀吉がホールにいないがどうしたんだ」

「まだ、帰ってきていません」

参ったな。秀吉がいないとむさい男のホールスタッフじゃ、客が集まらない。

何か手を打たないと……。あ、そうだ。試食宣伝をやってみるか。

厨房の中に入り、試食宣伝のために準備に掛かるとしよう。厨房に入ると康太とその他の厨房担当が料理を作っていた。

「康太、客の注文に対応しつつ、胡麻団子を大量に作れるか？」

「……………作れない事は無い。何をするつもりだ？」

注文された料理を作りながら答える康太。一つ一つ、正確に素早く仕上げる。

「試食宣伝でもしようと思っとな。もちろん、店で販売するサイズより小さいのでな」

「……………わかった」

そう言うときミニ胡麻団子を作り始めた。大きさ的には普通のサイズの半分の位の大きさだ。

作るからには当然お金が掛かる訳だが……ここは自分の懐から出しますか。

くう、どれくらい作られるのか分からないが、大規模な出費になる

ことだろう。

ともあれ、俺も手伝いをせねばな。腕を捲り、手を入念に洗って、仕事に掛かった。

「ん？ この胡麻団子はなんだ？」

厨房の隅の方にピラミッド状に積まれていた胡麻団子に目がついた。おかしいよな。作った胡麻団子はすぐにホールへ持ってかれているのに、ここのは放置されたままだ。

「……………それは、姫路の」

絶対に作らしてはいけないと、雄二が通告したはずなんだが……………止められなかったみたいだな。

「姫路が作ったやつか…………ハア。誰か須川連れてこい。処理させる」

「まだ、気を失っていますが連れてきました」

「おし、口を開けろ」

気を失っている須川の口が開かれる。

姫路の殺人団子は十個。須川は耐えられるかな。耐えてくれよ。

「アーメン。ほい」

「んゴバっ！」

祈りを捧げながら、一個目を放り込む。一瞬、須川の身体が痙攣した。

「二個追加」

「エリシャっ！」

次は二個放り込むと、更に激しく須川の身体が揺れる。うん、まだイケるかな？

「もう二個追加」

「……………」

「アレ？」

おかしいぞ。須川が反応しない。それに加えて顔面が蒼白になっていく。

マズイと思い、須川の脈を測る。脈は弱々しく流れていた。

「衛生兵ー！」

衛生兵（保健委員）を呼ぶと何やら医療に使うと思われる物を持って現れた。

そして衛生兵が顔面蒼白の須川を確認すると、手を握りシャドーを少し行なった。

「せいやー！！」

「げふううっ！？」

衛生兵が拳を振り上げ、須川の左胸に叩き込んだ。ぶれる事なく拳

を叩き込まれた須川が身体をV字に屈折させた。

どうやら命に別状はなさそうだ。死んでしまったら、困るからな。

「蘇生が完了しましたが、依然として気を失ったままです」

「あ、ご苦勞」

感謝の意を示すと衛生兵は素早く、どこかに消え去った。

どうすつか……姫路の作ったこの残り……。明久にでも食わせようかな？

「オーダーです。胡麻団子四人前と飲茶をお願いしまーす」

姫路の胡麻団子の処理に迷っていると注文が来た。胡麻団子の方は康太らが手を掛けた。

じゃあ、俺は飲茶の用意でもすればいいのか。えーとレシピ、レシピ……。

「磁気のティーセット……葉の分量……オーケー」

レシピ通りに飲茶の用意をする。これで終わりかと思ったら、まだ続きがあった。

どうにもカップに一度注いで、捨てないといけないらしい。ははあ、せっかく注いだ茶を捨てるのは、どうにも抵抗感があるな。

まあ、レシピ通りにやんないといけないし、やるか。

「待ったアアアッ！ 飲茶を注ぐのは俺の役目だ！」

須川が親指を突き立て復活した。あー、そういや、飲茶に対して、凄いこだわり持っていたな。

「須川、もう大丈夫なのか？」

「何が？ うん？ そういえば、頭にもや掛かっている何をしているのか分からない」

「いや、覚えていなくて何よりだ。じゃ、須川先生、飲茶の注ぎ方をご教授願います」

「任せてくれ！」

一瞬、須川は考えこんだが、大して気にせずに飲茶の素晴らしさと注ぎ方について語り始めた。

おしっ！ 追求されることを免れた。このまま、須川の教授を受ける。

須川の飲茶の知識は大変、勉強になった。彼の教授を実践しながら、自分も飲茶注ぎを担当した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7778k/>

バカと天才の交響曲

2011年1月10日04時38分発行